

# ゴク・ロデンシェーラプ著『書簡・甘露の滴』 —訳注篇—

加 納 和 雄

## 1 はじめに

チベット自治区ラサにあるペルツェク研究所より、2006年には『カダム全集』第1輯(1-30巻)が、翌2007年には同第2輯(31-60巻)が出版され、これまで散逸したと思われてきたチベット仏教カダム派の貴重な未公開文献が、写本影印版として一挙に公開された。

『カダム全集』第1輯の収録作品についてはすでに拙稿(加納 2007)において紹介したが、第2輯に収録される作品(詳細については本稿末尾「資料」参照)の概要を示すと以下のようなものである。

- 第31-39巻 主にカダム派諸師の律関係の作品
- 第40-44巻 アビダルマ関係の作品
- 第44-47巻 プラマーナ関係の作品
- 第47-49巻 チム・ナムカータク(1210-1285年)の著作19点
- 第50巻 キョトゥン・モンラムツルティム(1219-1299年)の著作24点
- 第51-57巻 チョムデンリクレル(1227-1305年)の著作68点
- 第58-60巻 ギェルセ・トクメサンポ(1295-1369年)の著作31点

『カダム全集』第2輯の特徴は、ナルタン寺に属する著名な学者の作品が多く含まれることであり、そのほとんどが未公開の作品である。また仏教哲学文献のほか、チベット仏教史を解明する上で重要な、いくつかの歴史文献<sup>(1)</sup>が含まれる点も注目に値する。

『カダム全集』に含まれるこれらの貴重な資料の研究は端緒についたばかりであり、今後は個々の作品を一点ずつ丹念に精読してその資料的価値を吟味しながら、

それをチベット仏教思想史全体の中に位置づけていく作業が必要となろう。本稿ではそのような試みの手始めとして、加納2007に引き続きゴク・ロデンシェーラブ著『書簡・甘露の滴』(sPring yig bdud rts'i thig le、以下『書簡』と略称)を取り上げ、その和訳と訳注を提示したい。

ゴク・ロデンシェーラブ(rNgog Blo ldan shes rab、1059-1109年)は翻訳と著作を通じて、弥勒論書、中観、認識論論理学を中心とするインド仏教哲学の伝統をはじめて体系的にチベットに導入した、チベット仏教後伝期最初期の大家翻訳師である。彼の翻訳作品は58点にものぼり、いずれもチベット大蔵経に収録されている<sup>(2)</sup>。いっぽうその著作は50点ほど存在していたことが知られるが、現在まで発見および公開されているのはそのうちの9点にすぎない<sup>(3)</sup>。

ロデンシェーラブの著作はそのほとんどが注釈文献であるが、『書簡』は数少ない彼の単独著作の一つであり、自身の思想的立場が端的に綴られた貴重な作品である。

『書簡』は一部が後代の資料に引用されるものの、その原典は失われたものと考えられてきた。しかし、近年、デブン寺集会堂の二階に位置する十六羅漢堂においてその写本が発見され、『カダム全集』第1輯に収録された。筆者が先稿(加納2007)において提出した『書簡』の校訂テキストは、同写本とシャーキャチョクデンの注釈(『書簡』全体の約7割が回収可能; 加納2007: 7参照)にもとづいている。和訳においては、当校訂本を用いた。

## 2 『書簡』の構成

『書簡』はわずか29の偈頌<sup>(4)</sup>で綴られた(偈番号は本稿筆者による)小品であり、ロデンシェーラブが中央チベットで活躍した1095-1109年の間に著わされたと考えられ、その奥書にはガトン・シェーラプタクをはじめとするツォンカ地方のルスム(ru gsum)の僧団に宛てた手紙である旨が記される。『書簡』は後代の文献においてしばしば引用されることから、時代を超えて広く流布していた様子が知られる<sup>(5)</sup>。

『書簡』は、手紙を宛てたツォンカの僧伽に対する誠めを込めた序(第1-2偈)に始まり、書簡を差し出した目的を述べる結頌(第28-29偈)で終わる。これら序と結頌に挟まれる本論の部分は、以下の4部から成る。

1. 基礎修行(第3-9偈)
2. 空性説(第10-20偈)
3. 空性の修習(第21-23偈)
4. 仏の三身説(第24-27偈)

『書簡』にそれぞれ注釈を著したチョムデンリクレル [=レルティ] (1227-1305年)とシャーキャチョクデン(1428-1507年)では、科文の細部に関して多少の見解の相違が見られるが、概ね上記のような四部構成を想定していたようである。

「1. 基礎修行」は、輪廻の厭離、発心、慈悲、六波羅蜜、利他、学処の保持、持戒、師事という項目によって段階的に解説される。「2. 空性説」は、誤った立場の批判(第10-14偈)と「否定」についての分析(第15-20偈)から成る。「3. 空性の修習」は上記の空性説を承けるかたちで、いかなる執着もない悟りの状態を説き、「4. 仏の三身説」は悟りの果のありかたとして法身、報身、變化身をそれぞれ解説する。

なお『書簡』は全体にわたって宛先人へ呼びかけの表現形式をとり、偈の末尾の語は命令形で終わることが多いため、弟子への教誡がその著作の主目的であったと考えられる。

### 3 『書簡』にたいする科文および注釈文献

『書簡』は簡潔な韻文で綴られているものの、そこには巧みな比喻を交えたインド仏教思想のエッセンスが端的に織り込まれており、著者ロデンシェーラプの文才と博識がいかに発揮されている。しかし、難解な仏教哲学を、韻文という著作スタイルによって十全に論じ尽くすことはそもそも難しく、ややもすると舌足らずになりがちである。これはチベット語の韻文で著された哲学作品全般のもつ宿命ともいえる性格であり、本作もその例外ではない。このような『書簡』の難解な偈頌を理解するためには、その注釈文献に頼ることが不可欠である。現在までに知られている『書簡』に対する注釈書および科文は以下の3点である。

- (1) bCom ldan rig ral, *sPring yig bdud rts'i thig le'i bsdus don* (以下『書簡要義』). 『カダム全集』, vol. 59, pp. 251-253.
- (2) Shākya mchog ldan, *sPring yig bdud rts'i thig pa'i rnam par bshad pa* (以下『書簡小注』). The Complete Works, vol. 13, 178.6-181.6
- (3) Shākya mchog ldan, *sPring yig bdud rts'i thigs pa'i rgya cher bshad*

*pa dpag bsam yongs 'du'i ljon phreng* (以下『書簡大注』). The Complete Works, Vol. 24, 320-348.

### 3.1 チョムデンリクレル作『書簡要義』

(1)『書簡要義』は、チョムデンリクレルによる『書簡』の科文であり、わずかに3葉からなる小部の作品である。その写本は近年デプン寺十六羅漢堂において発見され、『カダム全集』第2輯の第59巻に収録されている(彼の著作の出版状況は本稿註119を参照)。文字はウメ字体で、行間には科文の各項目に対応する『書簡』の偈の冒頭句が小さめの文字で挿入される。チョムデンリクレルは冒頭2偈と末尾2偈を除いた本論全体(3-27偈)を、苦(3偈)・集(4偈)・道(5-21偈)・滅(22-27偈)からなる四聖諦に関する教誡とみなしており、同科文の特徴となっている。道諦の解説(5-21偈)はさらに発心(5-6偈)、戒(7-8偈)、智慧(9-18)、瞑想(19-21偈)に分けられ、滅諦の解説(22-27偈)はさらに見道(22偈)、修道(23偈)、無学道(24-27偈)に分けられる。このようにチョムデンリクレルの科文は、『書簡』の「基・道・果」(gzhi、lam、'bras)からなる構成を的確にとらえてその構成を四諦の観点から解釈するものであるが、はたして原典著者ロデンシェーラプ自身が四諦の教誡までも意図していたか否かという点については若干の疑問が残る。とはいえ同科文は『書簡』の内容を簡潔にとらえており、テキスト全体の構造を手早く把握するのに便利であるため、本稿末尾に「資料」としてその原文および和訳を提示した。

### 3.2 シャーキャチョクデン作『書簡小註』

(2)『書簡小註』は、(3)の『書簡大註』とともにシャーキャチョクデンによって著わされた大小2種の注釈のうちの一つで、特にロデンシェーラプの思想的立場が表明される『書簡』の第10-27偈に焦点を当てた、偈頌による小部の注釈である。シャーキャチョクデンは『書簡』の思想的立場を、「帰謬派・自立派などの解釈方法について〔中観をどちらか〕いっぽうに確定することのない、第三の中観の解釈方法」と定め、それこそが「ロデンサンポ(=ロデンシェーラプ)の立場であり、龍樹先生の意図であることは間違いない」と述べる<sup>(6)</sup>。この点はロデンシェーラプを自立派に帰属せしめるゲルク派の立場と異なっており、シャーキャチョクデンの反ゲルク派的態度が顕著に表明されたものとも理解できるであろう。またシャーキャチョクデンは『書簡』第14偈所出の「幻不二派」・「一切法無住派」という中観二派を、それぞれ自立派・帰謬派に対応すると解釈し<sup>(7)</sup>、両者の立場を批判する。しかし

『書簡』には「自立派・帰謬派」の語は現れず、そもそも当時ロデンシェーラプがこの二派分類を知っていたか否かはいまだ確認ができていないため、この解釈をそのまま鵜呑みにすることはできない。

### 3.3 シャーキャチョクデン作『書簡大註』

(3) 『書簡大註』(1500年成書)<sup>(8)</sup>は、『書簡』本文を引用しながら各偈を順次注釈していく体裁をとり、第1-9偈については各偈の冒頭句のみを引いて簡略に解説し、第10-27偈については各偈頌全体を引いて詳細に解説する<sup>(9)</sup>。『書簡大註』が『書簡』全体を、「教えを示す対象者への吉祥のことば」(1-2偈)、「本論」(3-27偈)、「結頌」(28偈)<sup>(10)</sup>の三部構成としてとらえる点は、チョムデンリクレルと共通する。いっぽうでシャーキャチョクデンは、「本論」を「甚深・広大道の確立」(3-20偈)、「道の実践方法」(21-22偈)、「果の体系」(23-27偈)に三分するが、この分類は四諦説にもとづいたチョムデンリクレルの分類方法とは異なる。シャーキャチョクデンの同注釈から抽出できる『書簡』の科文についてはすでに先稿(加納2007: 16-17)において提示した。また同注釈は『書簡』の偈頌について、適宜インド撰述文献の典拠を引用して示しているので、『書簡』の思想背景を把握するためには非常に有益である。ただしシャーキャチョクデンは、その大小2種の注釈書ではともに、自身の立場から独自の解釈を施し、その解釈が原典の文脈に沿わない場合があるため、注釈者の解釈に飛躍がないかどうか慎重に吟味した上で使用する必要がある。本稿に提示する和訳においては主に『書簡大註』を参照し、必要に応じて注記のなかで言及した。

## 4 『書簡・甘露の滴』和訳

以下に提示する和訳は、加納2007に定めた『書簡』のチベット語原典の校訂テキストを底本とするものである。テキストの異読一覧はすでに加納2007: 16において示したので、本稿では異読の取舍選択の根拠について注に記した。ただし明らかな誤写と判断しうるものについては逐一言及しない。

『書簡』本文に対する典拠あるいはそれに関連する一節を他文献に確認できた場合は注記した。

なお、校訂テキストに示した第28偈に関しては訂正案を指摘しておきたい。すなわち本稿筆者は校訂テキストにおいて、音韻上の理由とシャーキャチョクデンの

『書簡大註』の記述にしたがって、第28偈を a-f 句からなるものと解釈したが、本稿では abcd 句と ef 句を切り離して、abcd 句を第28偈とし、ef 句と次の一行をまとめて第29偈としたい。このようにすると第29偈の前半2行は11音節となり最後の行のみが3音節となるために音韻上の不都合を生じるが、文脈を考慮するとより妥当であると思われるため、暫定的にこのように訂正したい。なお、この第29偈周辺の写本末尾部分にはテキスト伝承上の混乱があった可能性が高く、たとえばチョムデンレルディの『書簡要義』に引かれる回向偈が現存写本に存在しない点や、シャーキャックデンの『書簡大註』においては第28偈が最終偈とみなされている点をその根拠として指摘できる。

本文理解に際しては、上記の3種の注釈文献とともに、トルンパ作『教説階梯大論』を適宜参照した。『教説階梯大論』はロデンシェーラプの弟子の手になる著作であり、当時の思想を復元するための貴重な手掛かりとなる場合がある。

[序]に始まる小見出しは本稿筆者が便宜上補足したものである。

#### [序]

信仰という堅固な地盤と、〔悟りへの〕熱意という立派な根をもち、  
心の本性についての思惟という幹ゆえに美しく、  
行の華が開花し、〔四〕撰事という涼しい〔木〕陰をもち、  
利他という甘い果実をもつ、聖なる大樹林である汝よ、〔1〕

〔心〕性たる虚空に依拠し、非如理作意たる龍によって化作され、  
愚かさという雲の集まりと、貪りという稲光の首飾りをもち、  
怒りというゴロゴロと轟き渡る雷鳴から発せられた、  
悪行という煌めく雷によって打たれることなかれ。〔2〕<sup>(11)</sup>

#### [輪廻の厭離]

生まれた後にやって来る病・老よりなる鋭い牙をもち  
無常を身体とする死魔が羅刹のようにやって来て、  
悪趣の生存領域<sup>(12)</sup>、つまり苦という無限の大いなる闇に  
この一群の人々を、〔彼らがどうする〕力も無いままに、連れ去ると<sup>(13)</sup>、しっかり思惟せよ。〔3〕<sup>(14)</sup>

## [悟りへの発心]

このような苦にあふれた深淵を臆念した後、  
不放逸の力を起こし、〔自らの〕身命を顧みないまま、  
煩惱という一群の敵を征するために怠慢なき心によって  
精進という鎧を纏い、忍耐の堅忍さを保持せよ。〔4〕<sup>(15)</sup>

死魔の軍<sup>(16)</sup>を征し、苦の大海を枯渇させ<sup>(17)</sup>、  
楽の源泉であるところの宝たる菩提に向けて発心し、  
自利に没頭して〔輪廻的〕生存を喜ぶ人と〔涅槃の〕寂靜を喜ぶ人(凡夫および声聞  
乘)を劣れるものとみなしてから<sup>(18)</sup>、両者(凡夫および声聞乘)を憐むべき対象とし  
て立てよ。〔5〕<sup>(19)</sup>

## [自利行と利他行]

六波羅蜜の階段をもち、  
潜在印象の排除という堅固な囲いによって巡らされ、  
智慧の壁と利他の鼓音によって美しい、解脱という天宮<sup>(20)</sup>に、  
自ら登り、他者をも導く方便に専念せよ。〔6〕<sup>(21)</sup>

## [持戒、師事、精進]

仏教という、苦の病を完全に鎮めるための<sup>(22)</sup>  
この最上の甘露を得た後、〔それが〕無駄にならないために  
最上の牟尼によって創始された学処を逸脱せずに  
誓戒をよく守り、優れた善知識によく仕えるべきである。〔7〕<sup>(23)</sup>

法行に勤しみ、心のままに利他に専念することによって  
人々は信じるようになる。〔よって〕正行に親近すべし。〔8〕<sup>(24)</sup>

## [善知識への師事から仏徳円満まで]

善知識という雲より正しく生じた、多聞という  
清涼な雨によって、煩惱という苦しみを鎮めて、  
善逝蔵という種子をよく潤わせて  
円満なる仏徳という作物を育てるべし。〔9〕<sup>(25)</sup>

[空性説の典拠]

諸法本性空のあり方に入るための門たる  
龍樹先生がお説きになった正しい論理書を、  
論理の自在者<sup>(26)</sup>たる『ヴァールティカ』作者〔ダルマキールティ〕の美しい思想に  
基づいて  
明瞭に理解してから、他の悪しき立場全てを雑草同様に捨てるべし<sup>(27)</sup>。[10]<sup>(28)</sup>

ここ〔チベット〕にやって来た「学者先生」と呼ばれる者たち<sup>(29)</sup>の大半はまた、  
論典に通じておらず、自らの悪しき見解によって〔人々を〕扇動し、  
二つの極端を求めて正しい道を排斥するので、  
彼らのことばのせいで、龍樹が説いた道を捨てるなかれ。[11]<sup>(30)</sup>

[誤った立場]

諸々の対象について、論理を通じて、何らかの形で存在すると主張する者と<sup>(31)</sup>、  
有為のあり方から超越した真理を正しい認識手段によって<sup>(32)</sup>確定する者。  
この両者は<sup>(33)</sup>、実体的把握という恐るべき大悪魔<sup>(34)</sup>の口に入り、  
〔誤った〕見解という鋭い牙によってしっかりと捕らえられる<sup>(35)</sup>。[12]<sup>(36)</sup>

「この有為の集合は存在しない」とは心に留めず、  
顕現対象だけを〔論じる人〕、或いはそれ(顕現対象)をほぼ否定することを論じる  
人<sup>(37)</sup>。

この両者とも正しい認識根拠の道から退き、  
誤った見解という、広漠たる砂漠<sup>(38)</sup>に必ず落ちるのである。[13]<sup>(39)</sup>

幻不二〔派〕と一切法無住〔派〕という中観の  
二つの流儀を区別することもまた、愚者を感じさせるものである。[14]<sup>(40)</sup>

[否定について]

否定を専らとする推理知に現れるそれらの事物の集合〔すなわち主辞などの論証式  
の要素〕を、その〔主辞などを対象とする〕知<sup>(41)</sup>によって肯定も否定もせず、正しい  
認識根拠によって成立するところの対象〔すなわち直接知覚・推理にて認識され



る対象]の部分について分析する知によって<sup>(42)</sup>、その対象〔全体〕を否定した後、ほかには〔何も〕肯定されないと確認される<sup>(43)</sup>。[15]<sup>(44)</sup>

夢において、街が破壊されたと

把握する知により

想定された対象たる「街の破壊」というものは、  
街そのものが存在しないならば、無い如く、[16]<sup>(45)</sup>

真実において事物は存在しないと

把握する御智によって想定された対象が、

真実として否定されること<sup>(46)</sup>も

真実として事物が存在しないならば、ありえない。[17]<sup>(47)</sup>

このように存在しない対象に関して

否定が適用されることはあり得ない。[18]<sup>(48)</sup>

それゆえ「存在しない」と確定すべき<sup>(49)</sup>、

否定対象である事物が成立していない場合、

否定は拠り所を離れており<sup>(50)</sup>、

知の前に存続しえない。[19]<sup>(51)</sup>

そのように事物は存在しないし、

それを否定することもまた成立しないなら<sup>(52)</sup>、

その両者(存在とその否定)を離れた、いかなる対象も

認識対象となることはあり得ない。[20]<sup>(53)</sup>

それゆえ所知の特徴から

知の動揺を排除して、

戲論聚を鎮めて、無我という

対象に知を正しく据えるべし。[21]<sup>(54)</sup>

[空性の修習]

そのように空性を修習して、  
実体的把握〔という妄想〕をよく鎮め、  
無我にすら執着することがなくなったとき  
真実をみるという。[22]<sup>(55)</sup>

あらゆる見解の垢を  
智慧の河によって洗い流したとき<sup>(56)</sup>  
知と所知は  
所縁のないままに鎮まる。[23]<sup>(57)</sup>

[仏の三身]

たとえば水の中に水を注いだり<sup>(58)</sup>、  
バターにバターがくっついているのと同様に、  
戯論を離れた所知自体<sup>(59)</sup>と、  
不可分な智慧が混ざる。  
それこそが<sup>(60)</sup>一切諸仏の  
本性たる法身なりといわれる。[24]<sup>(61)</sup>

その後、所知に対応した  
あらゆる世間的な虚偽の現れを  
認識なさる鏡の如きものが  
報身仏である。[25]<sup>(62)</sup>

前者(法身)、如実智は  
錯誤無き等至であり、知の活動は無い。  
後者(報身)、如量智は  
錯誤の顕現した後得であり、知の活動を伴う。[26]<sup>(63)</sup>

仏の変化身の集まりは、  
他者〔即ち衆生〕の識に顕現する。  
帝釈の影像などの比喩は

経典に説かれたごとし。[27]<sup>(64)</sup>

[結びの言葉]

以上のように、大乘の教えの集まりという乳海を攪拌することから  
生じた甘露、師子相承より得られるこのものを  
利他のために流布させるべく、  
手紙というかたちで著し、あなたに献上します。[28]<sup>(65)</sup>

正しい方であるあなたの法行が栄える原因、  
誓願と行とを含んだ、この発心儀軌<sup>(66)</sup>を  
どうかお受け取りください。[29]<sup>(67)</sup>

[奥書]

比丘ロデンシェーラプがガトン・シェーラプタクをはじめとするツォンカ地方のル  
スムの僧伽に宛てた書簡『甘露の滴』、完。

## 5 おわりに

本稿では、ロデンシェーラプの思想的立場を解明するための足がかりとして、彼の著作『書簡・甘露の滴』の和訳を提示した。本書はインドから仏教を導入し、その体系化を試みた、11世紀における後伝期チベット仏教の形成期の実態を如実に反映する貴重な資料である。

その思想的典拠をインド撰述文献にたずねると、本稿の注記において示したように、『中観心論』、『二諦分別論』、『入菩薩行論』にその多くが見いだされた。また第10偈には龍樹の論理書をダルマキールティの論理学的手法で理解すべき旨が説かれることから、ロデンシェーラプの思想はバヴィヤ、ジュニャーナガルバ、シャーンティデーヴァ、シャーンタラクシタなどの立場に近いものであったと予想される<sup>(68)</sup>。

今後は『書簡』の思想背景をより詳細に分析し、思想史の中に位置づけていく作業が必要となるが、この点については別稿を期したい。

## [資料1] チョムデンリクレル著『書簡・甘露の滴要義』

以下に提示するチョムデンリクレル著『書簡・甘露の滴要義』のチベット語テキストは、『カダム全集』第2輯第56巻249-253頁(= fol. 1a-3a)所収のウメ字体写本に基づく。写本の状態は良好である。ただし下記項目2.3.3.3.2の一部は写本が黒く塗りつぶされているために判読できない。また、必要に応じて同一写本に基づくとみられる活字化されたテキスト(『リクレル全集』第10巻70-75頁所収)を適宜参照した<sup>(69)</sup>。

本論中に先述したように、行間には科文項目に対応する『書簡』本文の冒頭句が、小さい文字で挿入されるが、この行間註所引の本文と『書簡』写本の本文とを比較すると次の4点で違いがみられる。(1)下記項目2.3.3.3.1(第11偈に対応)の行間註所引の sgrub pa gnyis med という語が『書簡』写本にはみられない。(2)項目2.3.4.1(第19偈に対応)の行間註所引本文は de ltar と読むが、『書簡』写本は de na と読む。(3)項目2.3.4.2(第20偈に対応)の行間註所引本文は de na と読むが、『書簡』写本は de ltar と読む<sup>(70)</sup>。(4)項目3.3の brtse ba'i で始まる偈頌は『書簡』写本にはない。『書簡要義』には『書簡』本文の文言の一部しか引用されないため、それだけを根拠にして断定することはできないが、チョムデンリクレルが参照したであろう『書簡』写本にはいくつかの重要な異読が含まれていた可能性がある。

下掲のチベット語テキストにおいては、写本の葉番号は欄外に示し、行間註に引用される『書簡』本文(各偈の冒頭句)は丸括弧内に太字で示し、さらにその偈番号を補足した。行間註所引の偈が『書簡』本文の語形と異なる場合はアスタリスク\*を付し(19偈, 20偈)、科文に対応する本文の偈が行間註に示されていない場合は鉤括弧内に偈番号を補足した(12偈, 14偈)。科文の各項目に付した番号は本稿筆者による補足である。写本の読みに問題がある場合には適宜訂正案を鉤括弧内 [=] に示した。

下掲の和訳においては煩雑さを避けるために、「第二項目に四項目あり」(gnyis pa la bzhi)などの記述を割愛して科文のみを番号順に並べなおして提示した。

སྤྱི་ཡིག་བདུན་ཅིའི་ཐིག་པའི་བསྐྱུ་དོན།

\*སངས་རྒྱལ་ལ་ཕྱག་འཚུལ་ལོ།

fol. 1b

ལོ་ཙ་བ་ཆེན་པོས་མཇུག་པའི་སྤྱི་ཡིག་བདུན་ཅིའི་ཐིག་པའི་དོན་གསུམ་གྱི།

1. གང་ཞེས་རྒྱལ་བ་(དད་པའི་: 1a)དང་། གང་ལས་རྒྱལ་བ་(རང་བཞིན་: 2a)གཉིས་ཀྱིས།  
བསྟན་བཅོས་ཀྱི་[=ཀྱིས་] གང་ལ་བྱ་ལ་ཤིས་པ་བཅོལ་བ་དང་།
2. བསྟན་བཅོལ་གྱི་གཞུང་བཤད་པ་དང་།
3. མཇུག་གི་དོན་ནོ།

གཉིས་པ་ལ་བཞི།

- 2.1. ལྷག་བཟུལ་ཤེས་པ་ལ་གདམས་པ་(སྐྱེ་བའི་: 3a)དང་།
- 2.2. ཀུན་འབྱུང་སྤོང་བ་ལ་གདམས་པ་(ལྷག་བཟུལ་མང་: 4a)དང་།
- 2.3. ལམ་བསྐྱོམ་པ་ལ་གདམས་པ་དང་།
- 2.4. འགོག་པ་མངོན་དུ་བྱེད་པའི་ཚུལ་བཤད་པ་ལོ།

ལམ་བསྐྱོམ་པ་ལ་བཞི།

- 2.3.1. བསམ་པ་སེམས་བསྐྱེད་པ་དང་།
- 2.3.2. ལམ་གྱི་གཞི་ཚུལ་ཁྲིམས་ལ་བསྐྱབ་པ་དང་།
- 2.3.3. ལམ་གྱི་རང་བཞིན་ཤེས་རབ་བསྐྱེད་པ་དང་།
- 2.3.4. བསྐྱེད་ནས་མཚན་མ་མེད་པ་ལ་མཉམ་པར་གཞག་པ་ལོ།

དང་པོ་ལ་གསུམ།

- 2.3.1.1. སེམས་བསྐྱེད་ཀྱི་བཟུལ་པ་བཅོལ་བ་(འཆི་བདག་: 5a)དང་།
- 2.3.1.2. དེའི་རྒྱ་སྤོང་རྗེ་བསྐྱོམ་པ་(བདག་དོན་: 5c)དང་།
- 2.3.1.3. སེམས་བསྐྱེད་ཀྱི་རྣམ་པ་བཤད་པའི་(མར་པའི་: 6a) །།

ཚུལ་ཁྲིམས་ལ་བསྐྱབ་པ་ལ་གསུམ།

- 2.3.2.1. བསྐྱབ་པ་བསྐྱུང་བ་(སངས་རྒྱལ་: 7a)དང་།
- 2.3.2.2. བཤེས་\*གཉེན་བསྐྱེན་པ་(བཤེས་གཉེན་: 7d) དང་།
- 2.3.2.3. གཞན་དོན་གྱི་སྤོང་བ་ལ་བསྐྱབ་པའི་(ཚས་སྤོང་: 8a) །།

fol. 2a

ཤེས་རབ་བསྐྱེད་པ་ལ་བཞི།

- 2.3.3.1. ཐོས་པའི་རྒྱལ་སངས་རྒྱལ་གྱི་ས་བོན་རྒྱན་པར་བྱ་བ་(བཤེས་གཉེན་: 9a) དང་།
- 2.3.3.2. ལྟ་བུ་དངོས་པ་(ཚོས་རྣམས་: 10a)དང་། དེ་རྟོགས་པའི་རྒྱ་(རིགས་པའི་: 10b)གཉིས་ གྱིས་དབུ་མའི་ལྟ་བུ་བས་བྱང་རྒྱལ་གྱི་སྐྱ་གྱུ་བསྐྱེད་པ་དང་།
- 2.3.3.3. ལྟ་བུའི་མི་མཐུན་ཕྱོགས་དྲོར་བ་དང་།
- 2.3.3.4. ལྟ་བུའི་དོན་ཚད་མས་གཏན་ལ་དབབ་པ་ལོ། །

མི་མཐུན་ཕྱོགས་དྲོར་བ་ལ་བཞི།

- 2.3.3.3.1. དངོས་པོར་སྐྱ་བའི་ལུང་(ཤུ་རྟེ་ཏ་: 11a)གིས་དབུ་མའི་ལྟ་བུ་(སྐྱབ་པ་གཉིས་མེད་)མི་ འདྲོར་བ་དང་།
- 2.3.3.3.2. དངོས་པོ་དང་སྟོང་ཉིད་བདེན་པར་བསྐྱོམ་པར་འཇིན་(?) བ་བ་དུག་ཅན་དང་ (?) མཚུངས་པ་དང་ [12] །
- 2.3.3.3.3. ལྷང་པ་མེལ་ཞིང་མི་ལྷང་པ་ལ་སྐྱོ་འདོགས་གཅོད་པ་ལོག་ལྟ་ཡིན་པ་(ལུ་བྱེད་: 13a)དང་།
- 2.3.3.3.4. ལྷུ་མ་ལྟ་བུ་དང་གཉིས་མེད་ཀྱི་ཤེས་པ་དོན་དམ་དུ་འདྲོད་པའི་དབུ་མ་འབྱུལ་པ་ལོ་ [14] ། །

ལྟ་བུའི་དོན་ཚད་མས་གཏན་ལ་དབབ་པ་ལ་གཉིས།

- 2.3.3.4.1. ལྟ་བུའི་དོན་དགག་སྐྱབ་ཀྱི་སྐྱོས་དང་བྲལ་བ་ཡིན་པ་དང་།
- 2.3.3.4.2. དེ་རྒྱལ་པར་བཤད་པ་ལོ། །

དང་པོ་ལ་གཉིས།

- 2.3.3.4.1.1. དགག་སྐྱབ་དང་བྲལ་བར་རྗེས་དཔག་གི་[= གིས་] དེས་པ་(དགག་པ་: 15a)དང་།
- 2.3.3.4.1.2. བདེན་པ་བཀག་ནས་སྟོང་པར་མི་བཟུང་པ་ལོ་(ཚད་མས་: 15c)། \*fol. 2b

རྒྱལ་བཤད་ལ་གསུམ།

- 2.3.3.4.2.1. དགག་བྱ་མེད་ན་བཀགས་པ་མི་འབྱུང་བ་མཚོན་བྱེད་ཀྱི་དཔེ་(ཆི་ལམ་: 16a)དང་།
- 2.3.3.4.2.2. དཔེས་མཚོན་པའི་དོན་(ཡང་དག་: 17a)དང་།
- 2.3.3.4.2.3. དེས་ན་དགག་སྐྱབ་ཀྱི་སྐྱོས་པ་དང་བྲལ་བ་ལོ། །

བཞི་པ་བསྐྱེད་ནས་མཚན་མེད་ལ་གཞག་པ་ལ་གཉིས།

- 2.3.4.1. དངོས་དང་དངོས་པོ་མེད་པ་ལ་རྣམ་པ་གཞན་མེད་པ་(དེ་ལྟར་: \*19a)དང་།
- 2.3.4.2. དེ་གཉིས་ཀར་མི་འཇིན་པ་ལ་སྐྱོ་གོམ་པར་བྱ་བ་ལོ་(དེ་ནས་: \*20a)། །

དོན་བཞི་པ་འགོག་པ་མངོན་དུ་བྱེད་རྒྱལ་ལ་གསུམ།

- 2.4.1. མཐོང་ལམ་གྱིས་འགོག་པ་མངོན་དུ་བྱེད་པའི་ཚུལ་(དེ་ལྟར་སྤོང་: 22a)དང་།
- 2.4.2. གོམ་ལམ་གྱི་[=གྱིས་] འགོག་པ་མངོན་དུ་བྱེད་པའི་ཚུལ་(གང་ཚེ་: 23a)དང་།
- 2.4.3. མི་བསྐྱོབ་པའི་ལམ་གྱིས་འགོག་པ་མངོན་དུ་བྱེད་པའི་ཚུལ་ལོ། །

འདི་ལ་བཞེ།

- 2.4.3.1. དཔེ་དང་དོན་གྱིས་ཚོས་སྐྱབ་བཤད་པ་(དཔེར་ན་: 24a)དང་།
- 2.4.3.2. འོངས་སྐྱབ་བཤད་པ་དང་(དེ་རྗེས་: 25a)།
- 2.4.3.3. དེ་གཉིས་མཉམ་རྗེས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་སུ་བསྐྱབ་པ་(ལྟ་ན་: 26a)དང་།
- 2.4.3.4. སྐྱལ་པའི་སྐྱབ་བཤད་པའོ་(སངས་རྒྱས་: 27a)། །

མཇུག་གི་དོན་ལ་གསུམ།

- 3.1. འདི་ཐོག་པ་གསུམ་ཀའི་སྤྱིང་པོར་བསྐྱབ་པ་(དེ་ལྟར་: 28a)དང་།
- 3.2. ཡི་དམ་སྤང་པའི་ཚོག་ལ་འབད་པར་གདམས་པ་(དམ་པ་: 29a)དང་།
- 3.3. དགོ་བ་བཟོ་བའོ་(བཟུ་བའི་: -)། །

ཐོག་ཚེན་ལམ་འབྲས་བུ་དང་ཕྱི་འདི་ཐོག་ལེ་མཚོག།\*  
 འདི་ལམ་ལེགས་པ་གཞན་འགའ་མ་མཐོང་པས། །  
 བསྐྱབ་དོན་དཔལ་ལྡན་གསེར་བཟང་དགོན་པ་ཟུ། །  
 བཅོམ་ལྷན་རལ་གྱིས་ལེགས་པར་བཀོད་པ་ཡིན། །

fol. 3a

དགོ་ལོ།

[和訳]

『書簡・甘露の滴要義』。

仏に礼拝。

1. 誰が勝利したのか、そして何に打ち勝ったのかという二点によって、〔本〕論書によって調御されるべき者たち〔すなわち読み手〕に対して吉祥を述べること  
(1-2 偈)
2. 論書の立場の解説
  - 2.1. 苦を知ることにかんする教誡(3 偈)
  - 2.2. 集を捨てることにかんする教誡(4 偈)
  - 2.3. 道を修習することにかんする教誡
    - 2.3.1. 意樂としての発心
      - 2.3.1.1. 発心の讃嘆(5 偈 ab 句)
      - 2.3.1.2. その原因である慈悲を修習する(5 偈 cd 句)
      - 2.3.1.3. 発心の相の解説(6 偈)
    - 2.3.2. 道の基盤である戒律を身につける
      - 2.3.2.1. 学処を守る(7 偈 a 句)
      - 2.3.2.2. 善知識に奉持する(7 偈 d 句)
      - 2.3.2.3. 利他行を身につける(8 偈)
    - 2.3.3. 道の本質である智慧を生み出す
      - 2.3.3.1. 「〔法の〕聴聞」という水が仏の種子を潤す(9 偈)
      - 2.3.3.2. 思想の内実とそれを理解するための原因(手立て)という二点を通じ<sup>(71)</sup>、中観思想によって菩提の芽を生み出す(10 偈)
      - 2.3.3.3. 〔当論書の〕思想に対立する立場を排除する
        - 2.3.3.3.1. 実在論者の立場によって中観思想を捨てない(11 偈)
        - 2.3.3.3.2. 実在と空性を真実〔存在〕として修習把握することは毒を持つことに等しい<sup>(72)</sup> ([12 偈])
        - 2.3.3.3.3. 顕現するものを除外し、顕現しないものを増益する(?)ことは邪見である(13 偈)
        - 2.3.3.3.4. 如幻派と不二派の知を勝義として認める中観は誤りである ([14 偈])
      - 2.3.3.4. 〔中観派の〕思想の本質を正しい認識根拠によって確定する
        - 2.3.3.4.1. 思想の本質は、否定と肯定の戯論を離れている
          - 2.3.3.4.1.1. 否定と肯定を離れていることを推理によって確定する(15 偈 ab 句)



2.3.3.4.1.2. 真実を否定した後に空に捉われない(15偈 cd 句)

2.3.3.4.2. 詳説

2.3.3.4.2.1. 否定対象が無ければ否定はあり得ないことを定める比喻 (16偈)

2.3.3.4.2.2. 比喻によって規定される内容 (17偈)

2.3.3.4.2.3. それゆえ〔真実は〕否定と肯定の戯論を離れている (18偈)

2.3.4. 〔智慧を〕生じた後に無相を瞑想する

2.3.4.1. 実在と非実在に違いはない (\*19偈)

2.3.4.2. 両者に執着しないことについて知を修習するべき (\*20-21偈)

2.4. 滅を現観する方法の解説

2.4.1. 見道によって滅を現観する方法 (22偈)

2.4.2. 修道によって滅を現観する方法 (23偈)

2.4.3. 無学道によって滅を現観する方法

2.4.3.1. 比喻と〔比喻の〕意味内容によって法身を解説する (24偈)

2.4.3.2. 受用身を解説する (25偈)

2.4.3.3. 両者を平等智として説く (26偈)

2.4.3.4. 変化身を解説する (27偈)

3. 結び

3.1. 同書を三乗の心髄として説く (28偈)

3.2. 本誓を取得する儀軌を努めて教誡する (29偈)

3.3. 回向 (対応偈欠)<sup>(73)</sup>

〔奥書〕

大乘の道果の最勝甘露の滴、これよりも勝れたものは決して他に見当たらないので、  
〔その〕要義を、吉祥セルサン寺にて、チョムデンレルティが正しく著した。善あれ。

〔資料2〕『カダム全集』第2輯(第31-60巻)収録作品リスト

以下に提示するリストは、『カダム全集目録』第2輯(第31-60巻)に基づいて作成し、若干の訂正を加えたものであり、先稿(加納2007)に提示した『カダム全集』第一輯(第1-30巻)収録作品リストを承けるものである。リスト中の各項目においては、順に巻数、著者(ボールド体)、著者の生存年代(丸括弧内)、作品名(イタリック体)、総葉数、頁番号(丸括弧内)、写本原本の所蔵場所を示した。著者の生存年代については『カダム全集目録』の記載を参照し、作品名については各作品の奥書、表

紙、本文所出の題名と比較し、『カダム全集目録』所掲の題名を適宜訂正して注記した(便宜上、奥書所出の題名を優先した)。写本原本の所蔵場所については『カダム全集目録』の解説箇所(31-107頁)に記される情報に基づいて補足し、以下の記号を使用した。B (= 'Bras dpungs gNas bcu lha khang デブン寺十六羅漢堂)、G (= rGyal rtse dPal 'khor chos sde ギャンツェ・ペンコルチューデ)。さらにデブン寺十六羅漢堂の写本整理番号が確認できるものに関してはそれを鉤括弧内に追記し<sup>(74)</sup>、写本が私蔵の場合は所蔵者の名を提示した。欠葉がある場合には『カダム全集目録』(第2輯、113-115頁)を参照して随時注記した。目録に記載されていない作品については「目録未記載」と記した。なお『カダム全集』には各作品著者の紹介文および一部の作品の科文が全集編者によって付されているが、ここでは煩雑さを避けるために割愛した。

Vol. 31

rGya dmar ba Byang chub grags (12世紀前半)

*dBu ma'i de kho na nyid rnam par dpyod pa.*<sup>(75)</sup> 31 fols. (pp. 7-67); B [Phyi Tsa 19]

Bya 'dul 'dzin brTson 'grus 'bar (1100-1174)

*'Dul ba 'od ldan gyi stod smad kyi ti ka.*<sup>(76)</sup> 52 fols. [葉番号33は脱落] (pp. 81-180); B [Phyi Wa 58]

gNyal pa Dar ma 'od zer (11世紀末-12世紀初)

*'Dul ba mdo rtsa'i 'grel pa.* 125 fols. [葉番号43は脱落] (pp. 187-434); B [Phyi Wa 30]

rTsis 'dul 'dzin gZhon nu seng ge (12世紀ころ)

*Las kyi lde mig.*<sup>(77)</sup> 18 fols. (pp. 437-472); B [Phyi Wa 47]

Vol. 32

Rin chen skyabs (12世紀ころ)

*'Dul ba mdo ti ka 'thad ldan 'grel pa rin chen 'bum* (上).<sup>(78)</sup> 194 fols. (pp. 12-399); G.

Vol. 33

## Rin chen skyabs

*'Dul ba mdo ti ka 'thad ldan 'grel pa rin chen 'bum* (下). 194 fols. (pp. 10-396);

G.

Vol. 34

## 'Dar Tshul khrim rgyal po (11世紀末-12世紀初)

*So sor thar pa'i rnam par bshad pa.*<sup>(79)</sup> 18 fols. (pp. 11-45); B [Phyi Wa 34]*Tshig lé'ur byas pa sum brgya pa'i tshig 'grel.*<sup>(80)</sup> 23 fols. (pp. 51-96); B [Phyi Wa 27]

## Thag ma pa rDo rje gzhon nu (12世紀後半)

*'Dul ba'i bsdus don nor bu'i 'phreng ba.* 14 fols. (pp. 99-126); B [Phyi Wa 52]

## Chos kyi dbang phyug (12世紀)

*gZhi' thams cad yod par smra ba'i dge' tshul rnams kyi tshig lé'ur byas pa'i rnam par bshad pa.*<sup>(81)</sup> 29 fols. (pp. 133-189); B [Phyi Wa]*rTsa ba'i lung so sor thar pa'i tikka legs par bkod pa.* 91 fols. (pp. 195-377); B [Phyi Wa]

## 著者不明

*'Dul ba'i bslab pa spyir bstan gyi rnam bshad.* 39 fols. (pp. 385-461); B [Phyi Wa 17]

Vol. 35

## Gro ston bDud rtsi grags (1153-1232)

*Yang dag pa'i dge ba'i bshes gnyen gyi zhal gyi gdams pa lam mchog rin po che.* 10 fols. (pp. 5-23); B [Phyi Wa]*Byang chub sems dpai spyod pa 'jug pa'i tshig gi don zhib tu rnam par byed pa dga' ba rgya mtsho.*<sup>(82)</sup> 74 fols. (pp. 29-175); B [Phyi Tsha 29]*'Dul ba'i rnam bshad yid sbyin [= bzhin] nor bu'i them skas.* 123 fols. (pp. 183-

428); B [Phyi Wa 38]

**brTson 'grus grags** (12世紀後半?)

*dGe slong gi rnam par 'byed pa'i tika shes rab sgron ma zhes bya ba'i sgra  
bshad kyi bskabs kyi mchan.*<sup>(83)</sup> 2 fols. (pp. 431-433); B [Phyi Wa 518]

*sPyir bstan pa'i ti ka shes rab sgron ma.*<sup>(84)</sup> 41 fols. [葉番号 5 - 8 は脱落] (pp.  
439-512); B [Phyi Wa 42]

Vol. 36

**sPal ti chen po brTson 'grus dbang phyug** (1129-1215)

*'Grel pa 'od dang ldan pa'i tshig dang don ma lus pa blo'i me long la gsal bar  
byed pa.*<sup>(85)</sup> 65 fols. (pp. 11-141); B [Phyi Wa 13]

*'Grel pa 'od dang ldan pa'i tshig dang don ma lus pa blo'i me long la gsal bar  
byed pa* [上記作品の別写本]. 65 fols. (pp. 143-271); B [Phyi Wa 52]

**Byang chub seng ge** (12世紀末)

*bSlab pa'i gzhi rin po che'i phreng bar bsdebs pa lhung ba sde lnga'i kun tu  
spyod pa rin po che'i sgron ma.*<sup>(86)</sup> 63 fols. (pp. 279-405); B [Phyi Wa 42]

*bSlab pa'i gzhi rin po che'i phreng bar bsdebs pa lhung ba sde lnga'i kun tu  
spyod pa rin po che'i sgron ma* [上記作品の別写本]. 58 fols. [冒頭葉欠] (pp.  
409-522); B [Phyi Wa 42]

*dGe slong gyi kun tu spyod pa'i cho ga bsdus pa.*<sup>(87)</sup> 30 fols. (pp. 527-586); B  
[Phyi Wa 42]

Vol. 37

**Blo gros rgyal mtshan** (14世紀前半)

*'Dul ba mdo'i rnam bshad mdo'i nyi ma'i rgyan.* 225 fols. [葉番号37は脱落]  
(pp. 11-457); B [Phyi Wa 15]

Vol. 38

著者不明

*Sor mdo'i 'grel pa bdud rtsi yang snying tshig don gsal byed tikka.* 73 fols. [葉

番号40は重複] (pp. 9-153); B [Phyi Wa 30]

'Grel pa 'od dang ldan pa'i don bsdus pa.<sup>(88)</sup> 7 fols. (pp. 155-170); B [Phyi Wa 52]

**bSam gtan bzang po** (15世紀前半)

'Dul ba'i bstan bcos me tog phreng rgyud kyi ti ka bla ma'i legs bshad rgya cher bshad pa legs bshad rgya mtsho<sup>(89)</sup> 102 fols. (pp. 177-381); B [Phyi Wa 41]

**Shes rab rgya mtsho** (14世紀ころ)

bSlab bya'i gnas gtan la 'bebs par byed pa'i legs bshad khyad par gsum ldan. 53 fols. (pp. 389-493); B [Phyi Wa 47]

Vol. 39

**dPal ldan seng ge** (16世紀ころ)

Dam pa'i chos 'dul ba lung kun las btus pa rin po che snang ba.<sup>(90)</sup> 30 fols. (pp. 9-69); B [Phyi Wa 47]

著者不明

So thar mdö'i 'grel pa zhes bya ba'i dka' gnad. 100 fols. [未完] (pp. 77-276); B [Phyi Wa 27]

Rab byung gi cho ga. 12 fols. (pp. 277-300); B [Phyi Wa 47]

Las chog gi brda sprod pa'i gdams ngag gi bshad pa bklags pas don 'grub pa. 50 fols. (pp. 301-400); B [Phyi Wa 47]

'Dul ba lung nas btus pa'i bshad sbyar. 50 fols. (pp. 401-500); B [Phyi Wa 518]

Vol. 40

**'Dad pa gZhon nu byang chub** (11世紀後半-12世紀前半)

Chos mngon pa kun las btus pa'i tikka shes bya thams cad gsal bar byed pa'i sgron me. 263 fols. (pp. 11-536); G.

Vol. 41

**bZad pa rin mo** (12世紀前半)

*Chos mngon pa kun las btus pa'i rnam par bshad pa gsal ba blo'i rgyan.*<sup>(91)</sup> 180 fols. [文字不明瞭な葉多数あり] (pp. 11-372); B [Phyi Dza 38]

著者不明

*Chos mngon pa kun las btus pa'i bshad pa rnam bshad snying po legs bshad kyi 'od zer.* 113 fols. [葉番号92は脱落] (pp. 379-602); B [Phyi Dza 1]

Vol. 42

**'Gar Dharma smon lam** (12世紀)

*Chos mngon pa kun las btus pa'i bshad pa shes bya gsal byed.* 173 fols. (pp. 11-560); bKra shis dbang rgyal 氏私蔵.

Vol. 43

**Thar pa Lo tsā ba Nyi ma rgyal mtshan** (13世紀)

*mNgon pa kun las btus kyi de kho na nyid 'byung ba.*<sup>(92)</sup> 274 fols. (pp. 11-555); B [Phyi Dza 47]

Vol. 44

**Śākya'i btsun pa bSod nams ye shes** (13世紀?)

*Chos mngon pa mdzod kyi sbyor tik.* 38 fols. (pp. 9-81); B [Phyi Zha 30]

著者不明

*Chos mngon rin chen mdzod gsal ba'i rgyan.*<sup>(93)</sup> 58 fols. [葉番号10、25、30、31は脱落] (pp. 89-196); B [Phyi Dza 51]

**gNyags**

*Tshad ma'i spyi skad cung zad bsdu pa.*<sup>(94)</sup> 8 fols. (pp. 199-214); B [Phyi Zha 415]

**Byang chub sems dpa' Jñānaśrī**

*Rigs pa'i snying po de kho na nyid bsdu pa gsal byed nyi ma'i 'od.* 16 fols.

(pp. 217-247); B [Phyi Zha 2]

*Tshad ma rnam nges kyi t̄ikka blo gsal mgul rgyan.* 101 fols. [冒頭葉欠] (pp. 253-456); B [Phyi Zha 21]

Vol. 45

**Chu mig pa Seng ge dpal** (13世紀)<sup>(95)</sup>

*Tshad ma sde bdun gyi don phyogs gcig tu bsdus pa gzhan gyi phyogs thams cad la rnam par rgyal ba.*<sup>(96)</sup> 77 fols. (pp. 11-161); B [Phyi Zha 15]

**Sangs rgyas rgyal mtshan**

*Tshad ma'i mtshan nyid bsdus pa rigs pa'i sgo 'byed.*<sup>(97)</sup> 9 fols. (pp. 165-181); B [Phyi Zha 1]

著者不明

*Tshad ma rnam 'grel le'u gsum pa'i rnam bshad.* 32 fols. (pp. 191-254); B [Phyi Zha 21]

*Tshad ma rnam 'grel rnam par 'byed pa.* 133 fols. (pp. 261-525); B [Phyi Zha 2]

Vol. 46

著者不明

*Thal phreng mdor bsdus pa.*<sup>(98)</sup> 10 fols. (pp. 7-25); B [Phyi Zha 45]

**Sangs rgyas bzang po**

*Rigs pa dang mi rigs pa'i de kho na nyid rnam par 'byed pa legs par bshad pa'i gter mdzod blo gsal gyi yid la dga' ba gter ba.*<sup>(99)</sup> 46 fols. [葉番号10-13、44は脱落] (pp. 33-115); B [Phyi Zha 8]

著者不明

*Tshad ma'i legs bshad dri med bcud kyi bdud rtsi.* 47 fols. (pp. 123-215); B [Phyi Zha 15]

**Graggs pa rgya mtsho** (13世紀)

*Tshad ma rnam par nges pa'i sbyor phreng yid bzhin nor bu.* 88 fols. [葉番号45は脱落] (pp. 225-399); B [Phyi Zha 6]

著者不明

*Tshad ma rnam nges kyi 'grel pa.* 63 fols. [冒頭葉および葉番号11、12、16、25、49は脱落] (pp. 405-520); B [Phyi Zha 12]

Vol. 47

**gTsang Drug pa rDo rje 'od zer** (12/13世紀)

*Yang dag rigs pa'i gsal byed sgron ma.*<sup>(100)</sup> 78 fols. [葉番号11、13は脱落] (pp. 11-165); B [Phyi Zha 31]

**mChims Nam mkha' grags** (1210-1285)

*dBu ma'i khri.* 19 fols. (pp. 171-208); B [Phyi Tsa 112]

*Shes rab kyi pha rol phyin pa'i sgom don rin chen spungs pa.* 5 fols. (pp. 209-218); B [Phyi La 128]

*sKyes bu gsum gyi lam legs pa.* 20 fols. (pp. 221-260); B [Phyi La 52]

*bCom ldan 'das mi g.yo ba dkar po la bstod pa mngon par rtogs pa gsal ba'i phreng ba.*<sup>(101)</sup> 2 fols. (pp. 241-264); B [Phyi Ma 1025]

*Rab gnas ji ltar sgrub pa'i man ngag.* 37 fols. (pp. 265-338); B [Phyi Ma 612]

*sMon pa byang chub mchog tu sems bskyed pa'i cho ga.*<sup>(102)</sup> 12 fols. (pp. 339-361); B [Phyi La 550]

*mChod pa ji ltar bsgrub pa'i tshul.*<sup>(103)</sup> 22 fols. (pp. 363-405); B [Phyi Ma 717]

*bDe gshegs brgyad kyi mchod pa.*<sup>(104)</sup> 3 fols. (pp. 407-411); B [Phyi La 501]

*gNas brtan phyag mchod cho ga.* 5 fols. (pp. 413-421).

*gNas brtan phyag mchod kyi rim pa'i phyag len gsal byed.*<sup>(105)</sup> 16 fols. (pp. 423-452); B [Phyi La 385]

Vol. 48

*gNas brtan chen po bcu drug la gsol ba btab pa'i man ngag.*<sup>(106)</sup> 53 fols. [葉番号25-31は脱落] (pp. 7-104); B [Phyi La 554]

*Zas mgo gcod thabs.*<sup>(107)</sup> 73 fols. [葉番号50および最終葉は脱落] (pp. 110-252).



*sNar thang nas rwa sgreng du springs pa'i 'phrin yig.*<sup>(108)</sup> 20 fols. (pp. 253-293);

B [Phyi La 550]

*Jo bo rje dpal ldan a ti sha'i rnam thar rgyas pa yongs grags.* 75 fols. [木版本、未完] (pp. 299-448).

*gZhi lam 'bras bu gsal bar byed pa rin po che gser phreng.* 51 fols. (pp. 453-554); B [Phyi La 432]

*Yan lag bdun pa'i man ngag.* 10 fols. (pp. 555-574); B [Phyi La 432]

#### Vol. 49

*sKyes pa'i rabs kyi rgyud kyi dka' 'grel.*<sup>(109)</sup> 91 fols. (pp. 9-191); B [Phyi La 432]

*Byang chub sems kyi 'brel [= 'grel] pa'i don yang dag par bslab [= bsdus] pa.*<sup>(110)</sup> 3 fols. (pp. 193-198); B [Phyi La 432]

*Chos mngon pa mdzod kyi don yang dag par bsdus pa.*<sup>(111)</sup> 33 fols. (pp. 199-262);

B [Phyi Dza 52]

#### Grags pa seng ge

*dBu ma la 'jug pa'i dka gnad.* 202 fols. (pp. 271-473); B [Phyi La 518]

#### Vol. 50

**sKyo ston sMon lam tshul khirms** (1219-1299)

*Chos bshad nyan la 'jug pa snang byed 'od zer rgyas pa.*<sup>(112)</sup> 8 fols. (pp. 9-26);

B [Phyi Tsa 74]

*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa legs par bshad pa skyes bu'i don sgrub.*<sup>(113)</sup> 69 fols.

[葉番号 5 -16は脱落] (pp. 31-146).

*Theg chen rgyud bla ma'i gdams pa.* 5 fols. (pp. 147-156); B [Phyi La 157]

*bSlab btus dang spyod 'jug gi khrid.* 7 fols. (pp. 157-170); B [Phyi La 550]

*Slob dpon zhi ba lha nas brgyud pa'i byang chub sems sbyong ba.* 6 fols. (pp. 171-182); B [Phyi La 550]

*'Da' kha ye shes kyi 'chi kha ma'i man ngag.* 2 fols. (pp. 183-186); B [Phyi La 550]

*Theg chen dbu ma'i gdams pa.* 3 fols. (pp. 187-192); B [Phyi La 550]

- rTen 'brel lag len du dril ba.* 21 fols. (pp. 193-234); B [Phyi La 550]  
*Phyogs bcu mun pa rnam sel.* 3 fols. (pp. 235-239); B [Phyi La 550]  
*Zhi ba lha'i sems bskyed.* 4 fols. (pp. 241-248); B [Phyi La 550]  
*Nyin zhag re'i bsags sbyangs kyi rim pa.* 2 fols. (pp. 249-251); B [Phyi La 518]  
*mKhas pa chen po snar thang pa'i gsan yig*<sup>(114)</sup> 14 fols. (pp. 253-280); B [Phyi  
 Ma 627]  
*sKyes bu gsum gyi lam rim gyi khrid.* 6 fols. (pp. 281-292); B [Phyi La 550]  
*Ye shes kyi bzhag sa.* 5 fols. (pp. 293-304); B [Phyi La 550]  
*mDo sde rgyan gyi khrid.* 3 fols. (pp. 305-310); B [Phyi La 550]  
*Chos nyid kyi khrid.* 3 fols. (pp. 311-316); B [Phyi La 550]  
*sNar thang gi gdan sa bdun pa'i rnam thar rin chen gter mdzod.*<sup>(115)</sup> 17 fols.  
 (pp. 317-350).  
*Chu mig pa chen po'i rnam thar.* 4 fols. (pp. 351-357); B [Phyi Ra 64]  
*Sangs rgyas sgom pa'i rnam thar.* 8 fols. (pp. 359-374); B [Phyi Ra 64]  
*Zhang ston chos bla ma'i*<sup>(116)</sup> *rnam thar.* 10 fols. (pp. 375-393); B [Phyi Ra 64]  
*Man ngag snyin po bsdus pa.*<sup>(117)</sup> 5 fols. (pp. 395-403); B [Phyi La 550]  
*Sher phyin gyi man ngag gi spyi khrigs lam gsal ba'i me tog.*<sup>(118)</sup> 6 fols. (pp.  
 405-416); B [Phyi La 550]  
*Jo bo rje'i dbu ma'i man ngag gi bshad pa.* 2 fols. (pp. 417-420); B [Phyi La  
 550]  
*'Od gsal snying po'i don.* 3 fols. (pp. 421-424); B [Phyi La 550]

Vol. 51

**bCom ldan rig ral** (1227-1305)<sup>(119)</sup>

- Slob dpon bcom ldan ral gri nyid kyi bstan bcos gcis pa'i kar [= dkar]  
 chag.*<sup>(120)</sup> 17 fols. (pp. 37-51); B [Phyi La 541]  
*bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od*<sup>(121)</sup> 53 fols. [葉番号3は脱落] (pp. 53-156).  
*bDe bar gshegs pa shākyā'i bstan pa'i bslab pa gsum rgyan gyi me tog.*<sup>(122)</sup> 78  
 fols. (pp. 161-317).  
*bsNyan gnas yan lag brgyad pa'i cho ga rgyan gyi me tog.*<sup>(123)</sup> 4 fols. (pp. 319-  
 326).  
*Byang chub mchog tu sems bskyed pa'i cho ga rgyan gyi me tog.*<sup>(124)</sup> 9 fols. (pp.

327-344); B [Phyi La]

sKyes rabs rgyan gyi me tog.<sup>(125)</sup> (pp. 349-592); B [Phyi La 54]

Vol. 52

*De bzhin gshegs pa 'od dpag med kyi zhing khams nub phyogs bde ba can la bstod pa 'dzam bu'i sil snyan; Slob dpon mkhas pa chen po dpal mar me mdzad ye shes la gsol ba 'debs pa'i tshigs su bcad pa dgu pa rol mo'i sgra snyan; brTson ldan gyi thos bsam pa.*<sup>(126)</sup> 6 fols. (pp. 3-13); B [Phyi La 321]

*De bzhin gshegs pa mi 'khrugs pa'i zhing khams shar phyogs mngon par dga' ba la bstod pa thar pa'i sil snyan.*<sup>(127)</sup> 4 fols. (pp. 15-21).

*rGyal yum yi ge gcig ma rgyan gyi me tog.*<sup>(128)</sup> 9 fols. (pp. 23-40); B [Phyi La 501]

*Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag brgya pa rgyan gyi me tog.*<sup>(129)</sup> 14 fols. (pp. 41-68); B [Phyi La 555]

*rGyal ba'i yum gyi 'grel bshad mngon par rtogs pa rgyan gyi me tog shes bya'i rgya mtsho.*<sup>(130)</sup> 188 fols. (pp. 75-449); B [Phyi Tsha 21]

*dBu ma rgyan gyi bsdus don.*<sup>(131)</sup> 1 fol. (pp. 451-452); B [Phyi La 501]

*rGyan bdun bshad pa.*<sup>(132)</sup> 4 fols. (pp. 453-459); B [Phyi La 501]

Vol. 53

*Grub pa'i mtha' rnam par dbye ba rgyan gyi me tog.*<sup>(133)</sup> 73 fols. (pp. 9-155).

*Byams pa dang 'brel chos kyi byung tshul.*<sup>(134)</sup> 6 fols. (pp. 157-167); B [Phyi La 501]

*Chos mngon pa mdzod kyi bsdus don.*<sup>(135)</sup> 5 fols. (pp. 169-177); B [Phyi Dza 52]  
*bsKal pa rgyan gyi me tog.*<sup>(136)</sup> 6 fols. (pp. 179-189).

*'Khor 'das rgyan gyi me tog.*<sup>(137)</sup> 6 fols. (pp. 191-201); B [Phyi La 501]

*bDen pa bzhi rnam par bshad pa rgyan gyi me tog.*<sup>(138)</sup> 50 fols. (pp. 207-303); B [Phyi La 501]

*rDo rje gdan rnam par bshad pa rgyan gyi me tog.*<sup>(139)</sup> 13 fols. (pp. 305-330).

*bsNgo ba rgyan gyi me tog.*<sup>(140)</sup> 8 fols. (pp. 331-345); B [Phyi La 371]

*sGra'i bstan bcos smra ba rgyan gyi me tog ngag gi dbang phyug grub pa.*<sup>(141)</sup> 45 fols. (pp. 351-440); B [Phyi Ma 522]

*Tshad ma kun las btus pa'i rgya char bshad pa rgyan gyis [= gyi] me tog.*<sup>(142)</sup>  
42 fols. (pp. 445-528).

Vol. 54

*Tshad ma rnam par nges pa'i 'grel bshad rgyan gyi me tog.*<sup>(143)</sup> 158 fols. (pp. 9-323).

*Tshad ma'i bstan bcos sde bdun rgyan gyi me tog.*<sup>(144)</sup> 98 fols. [葉番号93は脱落]  
(pp. 329-515); B [Phyi Zha 44]

Vol. 55

*'Brel pa brtag pa'i mchan dang sa bcad.*<sup>(145)</sup> 4 fols. (pp. 5-12); B [Phyi La 50]

*rTsod pa'i rigs pa'i bsdu don.*<sup>(146)</sup> 7 fols. (pp. 13-25); B [Phyi Ma 577]

*rTsod pa'i rigs pa rgyan gyi me tog.*<sup>(147)</sup> 73 fols. (pp. 33-177); B [Phyi Ma 577]

*Sangs rgyas bcom ldan 'das dang byang chub sems dpa' dang khro bo dang  
khro mo'i rigs kyi phyag tshad rgyan gyi me tog.*<sup>(148)</sup> 5 fols. (pp. 179-185);  
B [Phyi Ya 2]

*Bya rog gi legs nyes brtags thabs kyi man ngag.* 2 fols. (pp. 185-187) [Tsa mi  
lo tsā ba 著; 目録未記載]

*gSo ba rig pa rgyan gyi me tog.*<sup>(149)</sup> 74 fols. (pp. 195-343); B [Phyi Ma 577]

*Theg chen gyi rgyu 'bras rgyan gyi me tog.*<sup>(150)</sup> 4 fols. (pp. 345-352); B [Phyi La  
501]

*Ye shes snying po kun las btus pa rgyan gyi me tog.*<sup>(151)</sup> 16 fols. (pp. 353-383);  
B [Phyi La 501]

*Ngan song sbyong rgyud rgyan gyi me tog.*<sup>(152)</sup> 20 fols. (pp. 385-426); B [Phyi  
Ma 577]

*rJe btsun seng ge sgra'i man ngag.*<sup>(153)</sup> 1 fol. (pp. 427-428); B [Phyi Ma 726]

*rNam snang mngon par byang chub pa'i sku gsum gyi dkyil 'khor.*<sup>(154)</sup> 1 fol.  
(pp. 429-431); B [Phyi Ma 726]

*Sangs rgyas dang sangs rgyas tshul rnam par dbye ba rgyan gyi me tog.*<sup>(155)</sup>  
4 fols. (pp. 431-438); B [Phyi La 501] [目録未記載]

*'Jam pa'i dbyangs kyi mtshan yang dag par brjod pa rgyan gyi me tog.*<sup>(156)</sup> 22  
fols. (pp. 439-481); B [Phyi Ma 577]

*mTshan yang dag par brjod pa'i sgrub thabs rgyan gyi me tog.*<sup>(157)</sup> 3 fols. (pp. 483-488); B [Phyi La 501]

*sDom gsum 'od kyi phreng ba'i rgyan gyi me tog.*<sup>(158)</sup> 8 fols. (pp. 489-505); B [Phyi La 501]

*dKyiil 'khor gyi thig gi man ngag; bShad rgyud rdo rje phreng ba'i lé'u lnga bcu rtsa bzhi pa nas bshad pa'i dkyiil 'khor cho ga nyi shu; rNam lnga maṇḍala gyi sbyor ba.*<sup>(159)</sup> 9 fols. (pp. 505-521); B [Phyi Ma 205]

Vol. 56

*Sangs rgyas śākya thub pa rgyan gyi me tog.*<sup>(160)</sup> 2 fols. (pp. 7-10); B.

*'Phags pa byams pa rgyan gyi me tog.*<sup>(161)</sup> 2 fols. (pp. 11-13); B.

*gSang ba'i bdag po phyag na rdo rje la bstod pa rgyan gyi me tog.*<sup>(162)</sup> 5 fols. (pp. 15-24); B [Phyi La 501]

*Seng ldeng nags kyi sgrol gyi sgrub thabs.*<sup>(163)</sup> 2 fols. (pp. 25-29); B [Phyi Ma 1225]

*'Phags ma sgrol ma phyag 'tshal nyi shu rtsa gcig gi sgrub thabs kyi man ngag.*<sup>(164)</sup> 2 fols. (pp. 29-32); B [Phyi Ma 1025]

*Ri khrod lo ma can gyi sgrub thabs.*<sup>(165)</sup> 1 fol. (pp. 33-34); B [Phyi La 550]

*Ri khrod lo ma can gyi sgrub thabs.*<sup>(166)</sup> 1 fol. (pp. 34); B. [目録未記載。著者不明のテンギュル所収作品]

*bDe gshegs kun gyi snying po.*<sup>(167)</sup> 1 fol. (pp. 35-36); B [Phyi La 550] [Slob dpon Padma 著]

*Mi g.yo ba'i dmigs pa skor gsum.*<sup>(168)</sup> 1 fol. (pp. 37-38); B [Phyi La 550]

*Sangs rgyas tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs.*<sup>(169)</sup> 1 fol. (pp. 39-40); B.

*Sangs rgyas sum cu rtsa lnga la bstod pa rgyan gyi me tog.*<sup>(170)</sup> 1 fol. (pp. 41-42); B [Phyi Ma 726]

*Don zhags kyi bsnyung gnas kyi man ngag.*<sup>(171)</sup> 3 fols. (pp. 43-45); B [Phyi Ba 7]

*Don zhags kyi bsdus don.* 1 fol. (pp. 45-46); B [Phyi Ba 7] [目録未記載]

*gCod kyi gdams pa nam mkha' sgo 'byed.* 3 fols. (pp. 47-52); B [Phyi Ma 1025]

*mChod pa'i cho ga rgyan gyi me tog.*<sup>(172)</sup> 7 fols. (pp. 53-65); B [Phyi La 501]

- dKyi'khor rgyan gyi me tog.*<sup>(173)</sup> 14 fols. (pp. 67-94); B [Phyi La 501]
- gTor ma'i cho ga.*<sup>(174)</sup> 5 fols. (pp. 95-103); B [Phyi Ma 726] [行間註がチ ヨ ム デン  
リクレルに歸される]
- mDo sde kun las btus pa rgyan gyi me tog.*<sup>(175)</sup> 73 fols. [葉番号54-55は脱落] (pp.  
109-248); B [Phyi La 501]
- sPrings yig bdud rtsi thig pa'i bsdus don.*<sup>(176)</sup> 3 fols. (pp. 249-253); B [Phyi La  
501]
- 'Jig rten gyi khams gzhi dang snying po me tog gis brgyan pa rnam par bshad  
pa rgyan gyi me tog.*<sup>(177)</sup> 7 fols. (pp. 255-268); B [Phyi La 501]
- dGyes pa rdo rje'i rgyud pa.*<sup>(178)</sup> 1 fol. (pp. 269); B.
- dGyes pa rdo rje rgyan gyi me tog.*<sup>(179)</sup> 86 fols. (pp. 277-447); B [Phyi Ma 522]
- dGyes pa'i rdo rje'i don yang dag par bsdus pa.*<sup>(180)</sup> 12 fols. (pp. 449-473); B.
- rNal 'byor ma'i rgyud kun du spyod pa rgyan gyi me tog.*<sup>(181)</sup> 4 fols. (pp. 473-  
492); B.
- Tshogs kyi 'khor lo'i cho ga rgyan gyi me tog.*<sup>(182)</sup> 4 fols. (pp. 493-500); B [Phyi  
Ma 102]
- mKha' 'gro seng gdong mas gsungs pa'i rdo rje'i tshig rkang.*<sup>(183)</sup> 6 fols. (pp.  
501-512); B [Phyi Ma 1025]
- sGyu ma chen mo rgyan gyi me tog.*<sup>(184)</sup> 13 fols. (pp. 513-537); B [Phyi Ma 577]
- 'Phags pa sdud pa'i pintartha.*<sup>(185)</sup> 7 fols. (pp. 539-552); B [Phyi Ma 57]
- 'Bum gyi 'gyur byang.*<sup>(186)</sup> 1 fol. (pp. 553-554); B.
- gSang ba snying po'i 'gyur byang.* 1 fol. (p. 555); B.

Vol. 57

- Chos mngon pa kun las btus kyi rnam par bshad pa rgyan gyi me tog.*<sup>(187)</sup> 314  
fols. (pp. 11-664); B [Phyi La 51]

Vol. 58

rGyal sras thogs med bzang po (1295-1369)

- Sems bskyed sdom pa rang gi blang ba'i cho ga.* 4 fols. (pp. 15-21); B [Phyi La  
182]
- sMon 'jug gi sems bskyed kyi cho ga.*<sup>(188)</sup> 14 fols. (pp. 23-49); B [Phyi La 182]

*Byang sems sdom pa'i brgyud pa'i bla ma rnams la phyag tshal ba.*<sup>(189)</sup> 1 fol.  
(pp. 49-50); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*Slob dpon chen po zhi ba lha'i lugs kyi smon 'jug gi sems bskyed kyi cho ga.*<sup>(190)</sup>  
15 fols. (pp. 51-76); B [Phyi La 182]

*sMon 'jug sems bskyed kyi rgyud pa'i bla ma rnams la bstod pa.*<sup>(191)</sup> 2 fols. (pp.  
76-79); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*dBu ma lugs su grags pa'i sems bskyed brgyud pa la phyag 'tshal ba.*<sup>(192)</sup> 1 fol.  
(p. 79); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*Blo sbyong brgyud pa'i gsol 'debs.*<sup>(193)</sup> 2 fols. (pp. 81-84); B [Phyi La 232]

*Blo sbyong don bdun ma'i snyan brgyud kyi tshig rnams yi ge nyung ngu'i sgo  
nas bkrol ba.*<sup>(194)</sup> 13 fols. (pp. 84-110); B [Phyi La 232]

*Bka' 'bum 'thor bu'i skor.*<sup>(195)</sup> 73 fols. [葉番号8-9、14-15は脱落] (pp. 115-247); B  
[Phyi Ra 46]

*Blo sbyong don bdun ma'i snyan brgyud kyi tshig rnams yi ge nyung ngu'i sgo  
nas bkrol ba.*<sup>(196)</sup> 20 fols. (pp. 249-286); B [Phyi La 355]

*rTen 'brel snying po'i khrid kyi rim pa.*<sup>(197)</sup> 6 fols. (pp. 287-297); B [Phyi Ma  
125]

*rTen 'brel snying po bla ma rgyud pa la gsol ba 'debs pa'i tshigs su bcad pa.*<sup>(198)</sup>  
2 fols. (pp. 297-300). [目録未記載]

*Blo sbyong zin bris dang dmar khrid zin bris.*<sup>(199)</sup> 40 fols. (pp. 301-380); B [Phyi  
La 522] [pp. 311.4-368.9: *Blo sbyong don bdun ma'i snyan brgyud kyi  
tshig rnams yi ge nyung ngu'i sgo nas bkrol ba*]

Vol. 59

*Theg pa chen po'i blo sbyong.*<sup>(200)</sup> 79 fols. (pp. 9-165); B [Phyi La 355]

*rGyal sras zhi ba lha'i gsung sgros.*<sup>(201)</sup> 4 fols. (pp. 167-173); B [Phyi La 182]

*mDo sde rgyan dang rgyud bla ma spyod 'jug rnams kyi 'grel tika gi dbu zhabs  
kyi tshigs su bcad.* 40 fols. (pp. 177-258); B [Phyi La 182]

*Phyag chen lhan cig skyes sbyor gyi khrid yig.* 10 fols. (pp. 259-277); B [Phyi  
La 182]

*Phyogs bcu'i sangs rgyas la bstod pa rgyal ba dgyes byed.*<sup>(202)</sup> 1 fol. (pp. 279-  
281); B [Phyi La 182]

*Byang chub sems dpa' bcu drug gi bstod pa.* 3 fol. (pp. 281-286); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*Sangs rgyas sman bla'i rjes gnang khyad par can.* 1 fol. (p. 286); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*Bla ma la bstod pa dang ba'i chu rgyun.* 2 fols. (pp. 287-291); B [Phyi La 182]

*Bla ma la bstod pa'i tshigs su bcad pa dad pa bskyed byed.* 1 fol. (pp. 291-293); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*mKhan chen lo tstsha ba chen po blo gros brtan pa la gsol ba 'debs pa'i tshigs su bcad pa.* 1 fol. (pp. 293-295); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*Bla ma dam pa chos kyi rje rin po che la gsol ba 'debs pa'i tshigs su bcad pa.* 2 fols. (pp. 295-298); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*mKhan chen lo tstsha ba chen po blo gros brtan pa la gsol ba 'debs pa'i tshigs su bcad pa.* 1 fol. (pp. 293-295); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*gSol 'debs.*<sup>(203)</sup> 2 fols. (pp. 298-301); B [Phyi La 182] [目録未記載]

*Jo bo rin po che'i bstod pa la sogs pa yi dam gyi lha 'ga' zhig gi bstod pa.* 7 fols. (pp. 303-316); B [Phyi La 182]

*lDong ston la gdams pa sogs springs yig gi skor.* 4 fols. [葉番号3は脱落] (pp. 317-322).

*bsNgo ba'i rim pa.* 3 fols. [葉番号3は脱落] (pp. 323-327); B [Phyi La 182]

*Theg pa chen po rgyud bla ma'i 'grel pa nges don gsal bar byed pa'i 'od zer.*<sup>(204)</sup> 63 fols. (pp. 333-461); B [Phyi Tsha 122]

Vol. 60

*Theg pa chen po mdo sde rgyan gyi 'grel pa rin po che'i phreng ba.*<sup>(205)</sup> 204 fols. (pp. 9-415); B [Phyi Tsha 103]

## 参考文献

### 一次資料

『カダム全集』(第1輯) *bKa' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs dang po.* Ed. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. Vols. 1-30. Si khron



- mi rigs dpe skrun khang, 2006.
- 『カダム全集』(第2輯) *bKa' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs gnyis pa*. Ed. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. Vols. 31-60. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007.
- 『教説階梯大論』 Gro lung pa Blo gros 'byung gnas, *bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i rin chen phreng ba (= bsTan rim chen mo)*. ACIP, SE0070; 『カダム全集』 vol. 4, 35-735, vol. 5, 3-432.
- 『現觀莊嚴論大注』 Haribhadra, *Abhisamayālaṃkāṛālokā Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitāvyaḥkhyā*. Tokyo: The Tōyō Bunko, 1932-1935 (repr. 1973).
- 『五次第』 *Pañcakrama*. Ed. K. Mimaki and T. Tomabechei, *Pañcakrama: Sanskrit and Tibetan Texts Critically Edited with Verse Index and Facsimile Edition of the Sanskrit Manuscripts* (Bibliotheca Codicum Asiaticorum 8). Tokyo: The Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, 1994.
- 『宗義莊嚴華』 bCom ldan rig ral, *Grub mtha' rgyan gyi me tog*. 『カダム全集』 vol. 53, 9-155.
- 『書簡』 rNgog Blo ldan shes rab, *sPring yig bdud rts'i thig le*. 『カダム全集』 Vol. 1, 707-710; 加納2007.
- 『書簡小註』 gSer mdog Paṅ chen Shākya mchog ldan, *sPring yig bdud rts'i thig pa'i rnam par bshad pa*. The Complete Works, vol. 13, 178.6-181.6
- 『書簡大註』 gSer mdog Paṅ chen Shākya mchog ldan, *sPring yig bdud rts'i thigs pa'i rgya cher bshad pa dpag bsam yongs 'du'i ljon phreng*. The Complete Works, Vol. 24, 320-348.
- 『書簡要義』 bCom ldan rig ral, *sPring yig bdud rts'i thig le'i bsdus don*. 『カダム全集』, vol. 59, 251-253.
- 『中觀心論』 Bhavya/Bhāviveka, *Madhyamakahrdaya*. Ed. Chr. Lindtner, *Madhyamakahrdayam* of Bhavya. Adyar Library, 2003.
- 『中觀莊嚴』 Śāntarakṣita, *Madhyamakālaṃkāra*. 一郷1985参照。
- 『宝性論』 *Ratnagoṭravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra*. Ed. E.H. Johnston. Patna: The Bihar Research Society, 1950.
- 『宝性論要義』 rNgog Lo tsā ba Blo ldan shes rab, *Theg pa chen po rgyud bla ma'i don bsdus pa*. (a) Dharamsala, 1993; (b) NGMPP, Reel No. L 519/4 ≡ 東北蔵外 no. 6798; (c) 『カダム全集』 Vol. 1, 289-367.
- 『宝鬘五十頌』 Gro lung pa Blo gros 'byung gnas, *Rin po che'i phreng ba lnga bcu pa*. 『カダム全集』, vol. 4, pp. 3-6.
- 『二諦分別論』 Jñānagarbha, *Satyadvayavibhaṅga*. Ed. M. D. Eckel, *Jñānagarbha's Commentary on the Distinction between the Two Truths: An Eighth Century Handbook of Madhyamaka Philosophy*. New

York, 1986.

- 『入菩薩行論/細注』 Prajñākaramati, *Bodhicaryāvatārapañjikā*. Ed. P.L. Vaidya, *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*. Dharmabhang: Mithila Institute, 1960.
- 『リクレル小作品集』 *bCom ldan rig pa'i ral gri gsung thor bu*. 2 Vols. [TBRC Work No. W1CZ1041].
- 『リクレル全集』 Ed. Kamtrul Sonam Dondrub. *bCom ldan rig pa'i ral gri'i gsung 'bum*. 10 Vols. Lhasa, 2006 [TBRC Work No. W00EGS1017426].

## 二次資料

### 『カダム全集目録』(第2輯)

*'Bka' gdams gsung 'bum 'phyogs sgrig thengs gnyis pa'i dkar chag*. Ed. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2007.

### 『デブン寺古籍目録』

*'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag*. dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. 2 Vols. Mi rigs dpe skrun khang, 2005.

## 一郷正道

1985 『中観荘嚴論の研究—シャーンタラクシタの思想—』、文栄堂。

## 江島恵教

1980 『中観思想の展開—Bhāvaviveka 研究—』、春秋社。

2003 『空と中観』、春秋社。

## 加納和雄

2007 「ゴク・ロデンシェーラブ著『書簡・甘露の滴』一校訂テキストと内容概観一」、『密教文化研究所紀要』20、1-58。

## 小林守

1993 「チベットにおける如幻中観、無住中観をめぐる論争(1): rNgog lo chen/Tsong kha pa/mKhas grub rje」、『知の邂逅—仏教と科学』(塚本啓祥教授還暦記念論文集)、佼正出版社、473-487。

2007 「サキャ派によるインド流中観二派の解釈」、『印度哲学仏教学』22、1-39。

2008 「中観派からみた智慧の優劣」、『日本佛教学會年報—仏教と智慧—』73、193-209。

## 宮崎泉

2005 「アティシャの論理学に対する立場」、『哲学研究』580、15-37。

Cabezón, J.I.

- 2009 The Madhyamaka in Gro lung pa's bsTan rim chen mo. *Proceedings of the Eleventh Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Königswinter 2006. Beiträge zur Zentralasienforschung*. Halle: IITBS. (印刷中)

Heitmann, A.

- 2004 *Nektar der Erkenntnis, Buddhistische Philosophie des 6. Jh.: Bhavyas Tarkajvālā I-III.26*. Aachen: Shaker Verlag.

Kano, K.

- 2006 *rNgog Blo-ltan-shes-rab's Summary of the Ratnagotravibhāga: The First Tibetan Commentary on a Crucial Source for the Buddha-nature Doctrine*. Dissertation Thesis, Hamburg University.
- 2009 rNgog-lo's Topical Outline of the Ratnagotravibhāga Discovered at Kharakhoto. Orna Almogi (ed.), *Contributions to Tibetan Literature. Proceedings of the Eleventh Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Königswinter 2006. Beiträge zur Zentralasienforschung*. Halle: IITBS. (印刷中)

Khang dkar Tshul khrims skal bzang

- 2004 *rJe tsong kha pa'i lam rim chen mo'i lung khungs gsal byed nyi ma'i stod cha*, 日藏仏教文化叢書 VII, 西藏仏教文化協会.

Kramer, R.

- 2007 *The Great Tibetan Translator: Life and Works of rNgog Blo ldan shes rab (1059-1109)*. *Collectanea himalayica* 1. München: Indus Verlag.

Mathes, K-D.

- 2006 Blending the Sūtras with the Tantras: The Influence of Maitrīpa and his Circle on the Formation of Sūtra Mahāmudrā in the Kagyu Schools. *Tibetan Buddhist Literature and Praxis: Studies in its Formative Period 900-1400*. Ed. R.M. Davidson and Chr.K. Wedemeyer (Proceedings of the Tenth Seminar of the IATS, Oxford 2003, vol. 10/4). Leiden: Brill. 201-227.

Mimaki, K.

- 1982 *Blo gsal grub mtha'*. Kyoto: 人文科学研究所.

## 謝辞

『書簡』の読解に際してはツルティムケサン教授および小林守教授にご教示を仰ぎ、本稿で言及した中観文献の典拠については赤羽律氏および安間剛志氏からご教示いただいた。校正にあたっては川崎一洋氏にご助力頂いた。記して謝意を表します。

(平成20年度文部科学省科学研究費・若手研究スタートアップによる研究成果。)

## 註

- (1) 『カダム全集』第2輯には次の歴史文献が収録される。チム・ナムカータク, *Jo bo rje dpal ldan a ti sha'i rnam thar rgyas pa yongs grags* (vol. 48, pp. 299-448); キョトン・モンラムツルティム, *mKhan rin po che snar thang brgyad par byon pa'i gsan yig* (vol. 50, pp. 253-281), *sNar thang gi gdan sa bdun pa'i rnam thar* (vol. 50, pp. 317-351), *Chu mig pa chen po'i rnam thar* (vol. 50, pp. 351-359), *Sangs rgyas sgom pa'i rnam thar* (vol. 50, pp. 359-375), *Zhang ston chos bla'i rnam thar* (vol. 50, pp. 375-395); チョムデンリクレル, *bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od* (vol. 51, pp. 53-157), *Byams pa dang 'brel chos kyi byung tshul* (vol. 53, pp. 157-169).
- (2) ロデンシェーラブの翻訳作品一覧については、Kramer 2007: 51-70, 121-123を参照。
- (3) ロデンシェーラブの全著作についての一覧リストは、Kano 2006およびKano 2009を参照。
- (4) 『書簡』校訂テキスト(加納2007)において筆者はテキストを都合28偈からなると考えたが、その後、第28偈を2偈に分割すべきと考え、都合29偈からなると考えるにいたった。訂正案の詳細については本論を参照。
- (5) たとえばロンチェンパは発心を定義するために『書簡』第24偈を引用し、ツォンカパとタクツァンパは中観学派二分派である如幻派と無住派に言及するために『書簡』第14偈を引用する。小林1993、2007および加納2007: 5、50注36~37を参照。なお、『書簡』の書誌情報および内容概観については、先稿(加納2007)を参照されたい。
- (6) 『書簡小註』181.5を参照。
- (7) 「幻不二派・一切法無住派」とは一般には「如幻派・無住派」(*sgyu ma lta bu, rab tu mi gnas pa*)と略称される、中観学派の分類法の一つ。如幻派・無住派という言葉自体はインド後期大乘文献にまで遡れる古いものであるが、これらをそれぞれ自立派と帰謬派に配当する分類方法は、シャーキャチョクデンと近い年代に著述された文献に散見され(小林1993、2007参照)、チョムデンリクレル著 *gZhung lugs legs par bshad pa* も、如幻派・無住派と自立派・帰謬派に関連付けるが、自立派・帰謬派を無住派の支派とみなし、如幻派と区別しているので、上記の解釈とは異なる。Mimaki 1982: 32-33参照。
- (8) 『書簡大註』の著作年代については、加納2007: 50、注38参照。
- (9) 『書簡大註』が『書簡』本偈を引用する箇所については加納2007: 7を参照。
- (10) 『書簡大註』は第28偈を最終偈とみなし、第29偈については言及しない。

(11) 第1偈は、手紙を宛てた人物のもつ諸徳性を大樹に喩えて称讃し、第2偈は諸悪を雷に喩えて、その雷によって大樹が打たれること無きよう勧告する。第1偈の「信仰」、「熱意」、「思惟」、「行」、「四摂事」、「利他」は、前者から後者へと向かって進展してゆく段階を表し、同様に第2偈の、無明を本質とする「心性」、「非如理作意」、「愚かさ」、「貪り」、「怒り」、「悪行」も進展を段階的に示す。なお龍樹作『ラトナーヴァリー』4章50偈には王のもつ諸徳性が大樹に喩えられ、本作との類似性が指摘できる。

チョムデンリクレルの『書簡要義』は第1-2偈を「誰が勝利したのか、そして何に打ち勝ったのか」という二点によって、〔本〕論書によって調御されるべき者たち〔すなわち読み手〕に対して吉祥を述べること」という科文項目で説明し、シャーキャチョクデンの『書簡大註』は「教を示す対象者への吉祥のことば」と説明する。なお『書簡要義』の科文は本稿末尾の「資料」に提示し、『書簡大註』の科文は加納2007: 16-17に提示したので参照されたい。

(12) 校訂テキストにおいて筆者は写本の「悪趣の者たちの場」(ngan 'gro ba gnas)という読みを、より一般的な表現である「悪趣の生存領域」(ngan 'gro skye gnas)と暫定的に訂正した(加納2007: 14)。ただし内容的には変わらないためあえて訂正せずに写本の読みを残すことも可能である。

(13) 第3偈d句「この一群の人々を、〔彼らがどうする〕力も無いままに、連れ去ると、しっかり思惟せよ」(skye bo'i tshogs 'di dbang med khrid ces nges par bsam)について、校訂テキストのkhrid cingは誤植。khrid cesに改める。写本は「連れ去り」(khrid cing)と読むが、直後の「しっかり思惟せよ」(nges par bsam)と構文上うまくつながらないため、「連れ去ると」(khrid ces)に訂正した。

(14) 『書簡要義』は第3偈を苦諦にかんする教誡とし、『書簡大註』は業の因果を思惟して至高の道に入るための教えとする。

(15) 『書簡要義』は第4偈を集諦についての教誡とし、『書簡大註』は輪廻の損失を思惟して煩惱の制圧を実行する方法の教えとする。

(16) 写本は「死魔の軍を征し」('chi bdag dpung 'joms)と読むが、『書簡大註』は「死魔を征し」('chi bdag bdud 'joms)と読む。いずれの読みも可能であるが、一般的に「魔軍を征する」という表現が定型句として蔵内外文献に広くみられるため写本の読みを採用した。

(17) 「苦の大海を枯渇させ」という表現についてはたとえば以下を参照。アティシャ『心髓集』(D3950, 294a5-6:「無量の大慈悲を前提とし、苦海を枯渇させるための無量の大悲によって、自身において利他を達成するための宝のような堅固なる菩提心を生じるべし」、byams chen tshad med sngon 'gro bas // sdug bsngal rgya mtsho skems byed pa'i // snying rje chen po tshad med pas // bdag la gzhan don 'grub pa yi // byang chub sems ni rin po che // yang dag brtan pa bskyed par bya //)。

(18) 加納2007に定めた校訂テキストの読み、「劣れるものとみなしてから」(dman par ltas nas)のltasをbltasに改める。

(19) 『書簡要義』は第5偈を道諦についての教誡に含め、発心賛嘆と慈悲修習を教えるものとし、『書簡大註』は最勝菩提に発心する利益と誓願発起を教えるものとする。

(20) 「解脱という天宮」(thar pa'i khang bzangs)という表現はたとえば『中観心論』3章第6偈にみられる(mokṣaprāsāda)。

- (21) 『書簡要義』は第6偈を発心の特徴を解説する偈頌と位置づけ、同様に『書簡大註』も発心を解説するものと位置づける。第6偈d句「自ら登り、他者をも導く方便に専念せよ」(bdag nyid 'dzegs nas gzhan yang drang pa'i thabs la 'bad)に類する表現は、定型句として大乘論典の随所に散見される(たとえば『中観心論』1章第8偈など)。
- (22) 「仏教という、苦の病を完全に鎮めるための〔甘露〕」(sangs rgyas bstan pa sdug bsngal nad kun zhi byed pa'i)という写本の読みにたいして、『書簡大註』はsdug bsngal以降の語を省いているため句全体の読みは不明であるが、「苦の病を完全に鎮めるための仏教という〔甘露〕」と読んでいたことが予想される。内容的には大差なく、いずれの読みも可能だが、『書簡要義』は同偈冒頭をsangs rgyasと読んでおり写本と一致するため、写本の読みを採用した。
- (23) 『書簡要義』は第7-8偈を道諦のなかでも道の基盤としての戒律にかんする教えを説く偈頌と位置づけ、そのうち第7偈は学処をまもることと善知識に奉持することを説くという。一方、『書簡大註』は第7偈を道に入り三学処を学ぶ方法を説くものとする。
- (24) 『書簡要義』は第8偈を利他行を身につけることを説くものとし、『書簡大註』は他者に信心を起こさせることを説くものとする。
- (25) 『書簡要義』は第9偈を「聞」という水が仏の種子を潤すことを説くものとし、第9-18偈までの一連の偈頌(「道の本質である智慧を生じる」)の冒頭偈に位置づける。一方『書簡大註』は第9偈を他者を利することを説くものとして、第3-9偈までの一連の偈頌(「広大行に入る方法」)の最終偈として位置付ける。『書簡』においては、巧みな比喻を用いて基礎行を説く第9偈以前と、具体的な思想を解説する第10偈以降との間には、表現技法の上で大きな違いがあるため、第9偈までを一括りとする『書簡大註』の区切り方がより妥当であると思われる。
- 第9偈は、善知識にもとづいて多聞が生じてそれによって自身の善逝蔵を潤しつつ、果としての仏徳を育てることを説く。これに関連して『宝性論』1章第26偈にたいするアサンガの註(ed. Johnston, p. 25)は、「他からの声」(paratoghōṣa、すなわち「多聞」に相当)と各自の修行者がもつ「如理作意」(yonisōmanasikāra)とが三宝出現の因となることを述べて如来蔵との関連付けをなし、さらに『書簡』作者ロデンシェーラプは『宝性論要義』(4b3-4)においてこのことをより詳しく解説する。加納2007: 52、注53参照。ロデンシェーラプは『宝性論要義』において如来蔵を軸とした独自の修道体系を組み立てているので、『書簡』第9偈の所説はその体系を前提にしている可能性がある。
- (26) 「論理の自在者」(rigs pa'i dbang phyug)という写本の読みにたいして、『書簡大註』は「論理の究極」(rigs pa'i mthar thug)と読む。「論理の自在者」という表現は、ダルマキールティを指す形容句として広く使われるため写本の読みを採用した。
- (27) 「雑草同様に捨てるべし」(rtswa bzhin dor)という一節は筆者の訂正であり、写本は「根のように捨てるべし」(rtsa bzhin dor)と読む。タクツェン翻訳師著『宗義書自註』中観章には本偈が引用され、そこではrtswa bzhin dorという読みが示されるため、先稿の筆者の訂正は支持される。さらに、「雑草同様に捨てるべし」という表現はテンギュルに広くみられる表現であり、たとえばプラジュニャーカラマティ著『入菩薩行論細注』6章第121偈注にみられるので(D 3872, 34a7: rtswa bzhin du yongs su 'dor ba'o; Skt. ed. Vaidya, p. 112.22-23: tṛṇavat parityajati)、これによっても筆者の訂正は支持される。

(28) 『書簡要義』は第10偈を「菩提の芽を生み出すこと」を説くものとするが、『書簡大註』は第10偈と第11偈を一对の偈頌とみなし、それぞれ理(rigs)と教(lung)を説くものとする。

第10偈においてロデンシェーラブがダルマキールティの論理学を認めている点は注目に値するが、この記述は空性認識をめぐる世俗的な立場を表明したものであると解釈できる。勝義的な立場に関しては第20偈で「いかなる対象も認識対象となることはあり得ない」とある。これは宮崎氏が理解するアティシャの論理学にたいする立場と共通する。宮崎 2005: 22-24参照。また論理によって他派の誤った見解を排斥する必要性を説く点は以下の『中観莊嚴』第67偈の記述に通じる。

論理学の道にそって他学派が主張するあらゆる存在の自性を（我々は）否定するのである。それゆえ、（我々にはすこしも固執する立場がないから）批判される点はない（dngos po kun gyi rang bzhin ni // rigs pa'i lam gyis rjes 'brangs ba // gzhan dag 'dod pa sel bar byed // de phyir rgol ba'i gnas med do //）。(訳文は一郷1985: 165を参照。)

同様にロデンシェーラブの弟子トルンパも、『教説次第階梯』においては勝義は不可知であるという立場に徹し、勝義については「空である」とすらも認識することができないと述べてその立場をさらに推進している(Cabezón 2009参照)。その一方でトルンパは『宝鬘五十頌』において以下のように（恐らくは世俗の立場における）論理知の有効性も認めている。

「論理知によって真実を追求することに勤め励むべし」(rigs pa'i shes pas de nyid tshol la 'bad、『宝鬘五十頌』[2a5]、第39偈 d 句)、「それら〔泡沫のごとき世俗的現象〕を、海のごとき論理書によって吟味観察すべし」(de dag la sogs rigs tshogs rgya mtshos gzhigs、同[2a6]、第40偈 d 句)、「そのような論理によって他方の極端を否定してよく観察すべし」(de lta'i rigs pas mtha' gzhan bkag pa yis legs brtags、同[2a6]、第41偈 ab 句)。

『書簡大註』においてシャーキャチョクデンは、『プラマーナヴァールティカ』の最終的な立場は唯識なので「中観論理書」の立場と反立するという反論を想定し(『書簡大註』323.2-3)、それに自答するかたちで、ロデンシェーラブは『プラマーナヴァールティカ・アランカーラ』にもとづいて『プラマーナヴァールティカ』を中観の立場で理解しているので過失はないと主張する(『書簡大註』323.4-5)。さらにシャーキャチョクデンは同11偈に次のような意図が込められていると述べる。すなわち、空性の確定は認識根拠にもとづくこと、龍樹の論理書を論理学的手法で理解すべきこと、見えない対象を推理する際に増益を絶ち認識対象に結びついた因相(rgyu mtshan)によって欺かれてはならないということ、そして龍樹をダルマキールティ流の論理で理解するやり方以外の別の流儀を捨てるべしということなどである(『書簡大註』324.7-327.2)。またゲルク派の主張 — すなわちロデンシェーラブが活躍した当時は帰謬派のテキストと注釈書がまだチベット語に翻訳されていなかったが、ロデンシェーラブはすでにその流儀は良く知っており彼にとって帰謬論法だけが必要であり自立論証は不要であったとする主張 — を批判する(『書簡大註』326.2-327.2)。

(29) ここで揶揄される「学者先生と呼ばれる者たち」についてシャーキャチョクデンは、シチェ派やマハームドラー派の人々を指摘する。彼らは教証・理証に依拠せずに口決(upadeśa)だけによって悟りが得られることを認めるので、それを懸念してロデンシェーラブは「龍樹の

流儀を捨てるなかれ」と説いたのであろうと述べる。しかし一方で金剛乗の者のうちには龍樹の教証・理証に依らないで悟る尊い流儀もあるので、一概にそのようには確定できないとも付言する(『書簡大註』327.6-328.2)。

またシャーキャチョクデンは、アティシャ著『入二諦論』第13偈 bc 句の文言「直接知覚と推論は不要である。〔これらは〕他学派の批判を排斥するために〔知者によってなされたものである〕」(江島2003: 363参照)を引き、もしそこで推理が否定されているならば、この推理を不要とするアティシャの立場と、推理を必要とするロデンシューラブの第10偈の立場とが相容れないことになるため、アティシャの立場が間接的に批判の対象となってしまう可能性を指摘する(『書簡大註』328.3-4)。

さらには龍樹の論理書と相容れない思想を説くテキストをインドからチベットに持ち込んだ「パンディタ」の例としてサハジャヴァジュラを挙げる。すなわち彼がチベットにもたらしたマイトリーバ作『真実十偈』(*Tattvadaśaka*)の第2偈が龍樹の思想と矛盾する点を批判する。すなわち『真実十偈』第2偈は「真如は有相でも無相でも無いと認識しようと思む者たちにとって、中道とは、他でもない、師のことはによって飾られることなき中道なのである」(na sākāranirākāre tathatām jñātum icchataḥ / madhyamā madhyamā caiva guruvāganalamkṛtā //; Cf. Mathes 2006)と説くが、真如が無相ですらないと説く点と、「師のことはによって飾られないもの」を中道と述べることによって龍樹の論理書の中観と認めない点、この二点をシャーキャチョクデンは批判する(『書簡大註』328.4-329.2)。

(30) 『書簡要義』は第11偈を他派批判を説く一連の偈頌(第11-14偈)の冒頭に位置づけるが、『書簡大註』は上記のごとく第10-11偈を一組とし、第12-14偈を他派批判に位置づける。第11偈は第14偈まで続く一連の他派批判の総説を予め説いており、なおかつ第10偈所説の龍樹の論書についての議論を承けるので、『書簡要義』と『書簡大註』の解釈は異なるが、双方それぞれに根拠があるといえる。

(31) rnam 'gar gnas 'dod dang という表現については他文献に用例を見出すことができなかったが、rnam pa 'ga' zhiḡ du gnas par 'dod pa dang 「〔対象が〕何らかの形で存在すると主張する者と」を短縮した表現として理解した。『書簡大註』(329.6-7)はこれを、「〔対象が〕究極の了義として存在する」(nges don mthar thug tu gnas pa yin)と解釈する。

(32) 「正しい認識手段によって」(tshad mas)は『書簡大註』の読み。それにたいして写本は tshad ma と読むが、ここでは「正しい認識根拠」は「確定する」(nges 'dzin)の理由句であるため、文脈上および構文上の観点から写本の読みを採用しなかった。

(33) 第12偈所説の「両者」をシャーキャチョクデンは「中観の自立論証派と帰謬派それぞれに追従しつつもそれらの思想を完成していない人々」と理解し(『書簡大註』329.3-4)、第13偈所説の「両者」を自立派・帰謬派と理解する(『書簡大註』332.1-5および『書簡小註』179.1-2参照)。そして第12偈 ab 句を以下のように注釈する(『書簡大註』329.6-330.1)。

如実如量なる対象にかんして、中観論理書にもとづく論理を通じて分析する場合、中観自立論証派を自認する人々は、『所証たる顕現は幻の如しとする相対否定や、顕現は真実無なりという絶対否定と呼ばれるあれやこれやの理由に依拠した推理によって(gi を gis に訂正)理解する場合、〔対象は〕了義・究極のものとして存在する』といい、他方、中観帰謬派を自認するある者たちは、『あらゆる有為のあり方から超越した、一切



戯論を離れた真実と呼ばれる絶対否定そのものを正しい認識根拠によって確定して理解する必要がある。さもなくば石女の子と同じことになってしまうから』という。

しかしながら『書簡』の短い記述からここまで読み込むことは難しく、すべてを自立派・帰謬派の対立図に還元するシャーキャチョクデンの解釈については今後慎重に検討する必要があるろう。

- (34) 「恐るべき大悪魔」(gdon chen mi bzad)という読みは筆者による訂正。写本(gdon chen mi zad)および『書簡大註』(mi zad gdon chen)は「無尽の大悪魔」と読むが、たとえばロデンシェーラプが重視した文献であるプラジュニャーカラグプタ著『プラマナーヴァールティカアランカーラ』には「宗義という恐ろしい悪魔」(D4221, 157b3: grub mtha' mi bzad gdon de ni; siddhāntaviṣamagrahāḥ)という類似した表現がみられ、当該の文脈によく一致するため、これに従って訂正した。なおここでいう「悪魔」(gdon, graha)という語は人に憑依して心身に障害をもたらすものを指す。
- (35) 「捕らえられる」という語について、写本(zin pa と読む)と『書簡大註』(bzung ba と読む)は語形が異なるが意味は同じである。
- (36) 『書簡要義』は第12偈を「実在と空性を真実在として説く」者たちを批判する偈頌と位置づけるが、『書簡大註』は第12-14偈を一括りにして他派否定の略説に位置づける。

第12偈はトルンパの『教説階梯大論』(437b7-438a1)に類似する表現がみられる(「有と無のいずれかが論理によって存在すると説くならば、極端な見解という大悪魔によって捕われるので、中道から遠ざかる」、yod pa'am med pa'ang rung 'ga' zhig rigs pas gnas par smra na mthar lta ba'i gdon chen pos zin pas dbu ma'i lam las thag ring ba nyid do //)。加納2007: 52、注53参照。

この偈についてロデンシェーラプが参照した可能性のある文献としては上記の註34所掲の文献以外に、以下のものが挙げられる。バヴィヤ著『中観宝灯』(D3854, 71b2: 「実体把握という大悪魔が心に入り込んで狂人ようになってしまった者」、dngos por 'dzin pa'i gdon chen po snying la zhugs pas smyon pa lta bur gyur pa)、カマラシーラ著『中観光明』(D3887, 33b4: 「実体への執着という大悪魔によって捕われることによって」、dngos la zhen pa'i gdon chen gyis zin pa'i dbang gis)、アティシャ著『心髄集』(D3950, 94a3-4: 「虚偽ならざる教典と縁起などの論理を身につけ、実体的把握という大悪魔を残り無く斥けるべし」、mi slu ba yi lung dag dang // rten cing 'brel 'byung la sogs pa'i // rigs pa gang la goms pa yis // dngos por 'dzin pa'i gdon chen po // ma lus par ni bzlog par bya //)。

第12偈は有為や無為の対象を推論や直接知覚で認識することに執着することを誡めており、これは第20偈の所説「いかなる対象も認識対象となることはあり得ない」に通じる。ここでは勝義における真理把握が認識根拠を超越していることを述べており、第10偈の、空性を論理によって理解すべしとする立場とは対照的である。アティシャは『入二諦論』第10-14偈および『菩提道灯細注』(D3948, 282b3-6)において、勝義における空性把握について論理的手法に拘泥する立場を批判する。江島2003: 363および宮崎2005: 22-24参照。なお江島氏によるとアティシャの立場はバヴィヤに帰される『中観宝灯』の立場を踏襲するものであるという。江島2003: 377、379参照。すでに『書簡』第10偈への注(上記、注28)において言及したように、シャーキャチョクデンはアティシャの『入二諦論』第10-14偈が『書簡』第10偈と矛盾する可能性を

指摘するが、両者ともにプラマーナを通じて他派の異説を排斥するという点を主張している  
ので矛盾はないといえる。

- (37) 第13偈 a 句「この有為の集合は存在しないと心に留めず」(‘du byed tshogs ’di med ces yid la mi gnas par)という一節は、世俗的顕現を度外視して心内の形象のみについて論じる唯識派の立場を示唆すると考えられる。第13偈 b 句「顕現対象だけを〔論じる人〕、或いはそれ(顕現対象)をほぼ否定することを論じる人」(snang don nyid dam de la mang dag ’gog smra ba’i)は、それぞれ有形象論者(rnam bcas pa)を無形象論者(rnam med par grags pa)を示唆していると考えられ、『書簡大註』(332.1-5)および『書簡小註』(179.1-2)にもそのように説かれる。文法的には「顕現対象そのもの、或いはそれ(顕現対象)をほぼ否定する論者」と読むことも可能だが、内容上この解釈は採用し難い。『書簡大註』当該註釈箇所には、有形象論者を自立論証派に、そして無形象論者を帰謬論証派にそれぞれ同一視するというシャーキャチョクデン独自の思想がみられる。そしてシャーキャチョクデンは『書簡大註』(332.1-5)で第13偈 c 句で言及される「両者」という語を解説して次のように述べる。

中観無形象派と呼ばれる人々または帰謬派の立場を支持する人々は『これら一切の有為の集合は正しい認識根拠によって成立しないと確定して、本性を考察する心に住することなく、顕現しないものとみなしてから、顕現対象を特殊と普遍のみから否定する必要がある。なぜならそれ(有為)を否定しないならば顕現の相を克服できないので、無顕現に住するための障害になるからである。』という。そして有形象派または中観自立論証派に追従する人々は『顕現に過ぎないものを否定するならば〔論証式の〕主辞がなくなってしまう証因の体系を損なうことになってしまうため、それ(顕現するもの)は否定しないが、否定対象という真実を否定して真実無であることを証明するための属性とみなす場合はまた、証因の属性の異類が真実であることとそれ(顕現するもの)の単一性と複数性などは、本性を考察する心に住することなく行う必要がある。さもなくば真実の相を克服できないので〔有為を〕真実無として考察する知において障害となるから』という。以上のように語る両者もまた、論理知である正しい認識根拠を生じるための偉大な論理のあり方から退き、顛倒した見解という荒野つまり大砂漠(brog mya ngam gyi thang chen po)に落ちる。

なおチョムデンリクレルは「両者」を指して、「顕現しているものを除外し、顕現していないものを増益することは邪見である」という。『書簡要義』2.3.3.3.3参照。

- (38) 「砂漠」(mya ngam)は『書簡大註』の読み(上記注37参照)。これに対して写本は「憂い」(mya ngan)と読むが、構文上「砂漠」という読みがより適切とおもわれるためこれを採用した。
- (39) 『書簡要義』は第13偈を顕現について損減と増益する者たちへの批判として、『書簡大註』は他派否定の詳説とする。
- (40) 『書簡要義』は第14偈を「如幻派・不二派の知を勝義として認める中観は誤り」であることを説くものといい、『書簡大註』は第12-13偈に説かれる他派否定のまとめを説くものとする。すなわち『書簡大註』は第12-14偈所説の批判対象を同一とみなし、最終的に自立派・帰謬派への批判を説いていると解釈する。

第14偈においてロデンシューラプは如幻派・無住派のいずれもが偏った考えに頓着する誤っ

た立場とみなす。第14偈をめぐる後代の議論については小林1993、2007を参照。また小林2008は、9-12世紀までの間に成立した、如幻派・無住派という中観二派分類に言及する6点のインド文献を挙げ、この分類法がロデンシェーラプの時代によく知られていたことを指摘するため、ロデンシェーラプの思想的背景を考察する上で有益である。なお「愚者を感じさせる」という表現は、無理難題なる解釈を提示して愚かな聴衆を惑わし驚かせるというほどの意味であり、たとえば次のような類例がみられる。「それゆえこれらの〔経文冒頭句を曲解する〕人々は愚者を驚かせるために、後述される意味内容を、別の意味をもつテキストに牽強付会する。」(tad ami vakṣyamāṇam artham anyārthe granthe haṭhena ghaṭayanti mūdhavi-smāpanārtham, *Muktāvali Hevajrapañjikā*, Varanasi: CIHTS, 2001, p.2.11)

- (41) 「それらの事物の集合を、その知によって」(dngos tshogs de dag blo des)は『書簡大註』の読み。写本は「事物の集合を、その善なる知によって」(dngos tshogs dge ba'i blo des)と読むが、ここでは知の善不善は関係ないと思われるため採用しなかった。
- (42) 「部分について分析する知によって」(cha la rnam dpyod blos)は『書簡大註』の読み。写本は「諸部分を分析する知によって」(cha rnam spyod pa'i blos, spyod は dpyod の誤り)と読む。写本が誤字を含む点を除けば内容的にはほぼ同義である。
- (43) 鉤括弧内の語句は『書簡大註』(335.5-6)によって補った。ここでは空性を通じて事物の真実存在を否定した後、空性という概念を実体的に肯定しないことが説かれている。『書簡大註』(336.4)は「すなわち、最初の論証因と推理によって生起したり真実に成立したりするような対象を否定した後、その純粹な否定以外の対象は何も成立せしめられないと理解される」と注釈する。
- (44) 『書簡要義』は第15偈 ab 句を「〔真実が〕否定と肯定を離れていると推理によって確定すること」を説くといい、cd 句を「真実を否定した後空にとらわれない」ことを説くという。一方、『書簡大註』は15偈 abc 句を「推理が生じる手順」を説くものとし、cd 句を「論理知によって確定する手順」を説くものとする。本偈は『書簡』中最も難解な偈頌のひとつであり、解釈の余地はほかにもあるためさらなる検討を要するとおもわれるが、本稿では一応『書簡大註』の解釈に従った。『書簡大註』(335.7)は典拠として『二諦分別論』第18-19偈を引用する。

議論をしている両者の知に顕現している部分が存在する限り、それ〔すなわち顕現している部分〕に基づいて、主辞(dharmin)や属性(dharma)などを想定する。その時に推理が生じる。そうでない時にはない。それゆえ、そのように〔推理を〕述べる場合、いったい誰が否定しえようか。

その他、『二諦分別論』第23偈および『入菩薩行論』9章第33偈にも近い議論が見られる。

- (45) 『書簡要義』は第16偈を「否定対象が無ければ否定はありえないことを定める比喻」を説くものといい、『書簡大註』は第16-17偈を『入菩薩行論』所説の論理による解説を説くものとする。そして『書簡大註』(337.3-4)は『入菩薩行論』9章第141偈を典拠として引用する。
- それゆえ夢の中で息子が失われたとき、「彼がいない」という妄想が〔生じる〕。〔そのとき夢を見た人は〕そ〔の息子〕が存在するという妄想の生起に拘泥する。しかしそ〔の妄想〕は虚妄なものである(tasmāt svapne sute naṣṭe sa nāstīti vikalpanā / tadbhāvakaḥkalpanotpādaṃ vibadhnāti mṛṣā ca sā //)。

その他、『二諦分別論』第10偈 ab 句にもこれに類する議論がみられる。

(46) 「真実として否定されること」(yang dag bkag pa de nyid)は『書簡大註』の読み。写本は「真実として否定されることがない」(yang dag bkag pa med nyid)と読む。写本の読みを採用するならば第17偈全体を以下のように解釈しなおす必要がある。「…想定された対象は、真実として否定されることはないが、真実無でもない」。しかし第18偈に示される、非存在を否定することはありえないという結論を考慮するならば『書簡大註』の読みがより文脈に沿っているとおもわれるためこれを採用した。

(47) 『書簡要義』と『書簡大註』はともに第17偈を第16偈の比喩の所説内容を解説するものという。『二諦分別論』第9偈cd句に同様の議論がみられる。

否定対象が存在しないのだから、真実として否定が存在しないことは明瞭である (niṣedhyābhavāvataḥ spaṣṭam na niṣedho 'sti tattvataḥ // [『現観莊嚴論大注』45頁所引]、  
dgag bya yod pa ma yin pas // yang dag tu na bkag med gsal //)。

『書簡大註』(337.5)は『入菩薩行論』9章第139-140偈を典拠として引用する。

[反論:] 正しい認識手段が〔勝義において〕真理の基準にならないならば、それによって量られた〔知〕は虚妄なものになってしまう。したがって、真実において諸存在は空である〔との主張〕はありえない。〔答論:] 妄想された存在物を認識しなければ、その物の非存在というのは理解されない。それゆえ、まさに、ある存在物が虚妄なものであれば、その物が無いということは明らかに虚妄である (pramāṇam apramāṇam cen nanu tatpramitaṃ mṛṣā / tattvataḥ śūnyatā tasmād bhāvānām nopapadyate // kalpitaṃ bhāvam asprṣtvā tadabhāvo na gṛhyate / tasmād bhāvo mṛṣā yo hi tasyābhāvaḥ sphuṭaṃ mṛṣā //)。

(48) 『書簡要義』は第18偈を第16-17偈にたいする結論とする。一方、『書簡大註』は第18偈を「龍樹の教説に結び付ける」偈頌とする。『中観莊嚴』第72偈には同様の議論がみられる。

「生」等が存在しないから「不生」等〔の知識や表現が生ずること〕は、〔勝義として〕ありえない。それ(不生)のもと(生)が否定されているのであるから、それを表す言葉はありえない (skye ba la sogs med pa'i phyir // skye ba med la sogs mi srid // de yi ngo bo bkag pa'i phyir // de yi tshig gi sgra mi srid //)。 (訳文は一郷1985: 168を参照。)

『中観莊嚴』第72偈はトルンバ著『教説階梯大論』(435b5)にも引用され、そこでも同様の議論が展開される。

(49) 「確定すべき」(nges bya ba)は『書簡大註』の読み。写本は des bya ba と読むが文法的観点から採用し難い。

(50) 「拠り所を離れており」(rten bral ba)は『書簡大註』の読み。写本は「拠り所を離れるならば」(rten bral na)と読む。否定対象が成立しなければその否定には根拠がなく(「拠り所を離れている」)、それゆえ否定対象は認識されないということを第19偈は述べるので、写本の読みは文脈上採用し難い。

(51) 『書簡要義』は、第19-21偈を無相の瞑想について説く偈頌と位置づけ、第19偈については実在と非実在に違いが無いことを説く偈頌と解説する。『書簡大註』は、第19-20偈を思想体系を教説に結びつける一連の偈頌(第16-20偈)と位置づけ、第19偈についてはそれをまとめるものと解説する。また『書簡大註』(338.1)は『入菩薩行論』9章第33偈を第19偈の思想的典拠とし

て引用する。

空性の潜在印象を堅持することによって、存在物の潜在印象は消滅する。そして「何も無い」と反復することによって、のちにそれ〔すなわち空性の潜在印象〕すらも捨てられる (*śūnyatāvāsanādhānād dhiyate bhāvavāsanā / kiṃcin nastiti cābhyāsāt sāpi paścāt prahiyate //*)。

(52) 『書簡』第16-19偈参照。

(53) 『書簡要義』は第20-21偈を実在と非実在に執着しないことについて知を修習すべきことについて説くものとする。『書簡大註』(338.1)は『入菩薩行論』9章第35偈を典拠として引用する。

存在物も非存在物も知識の面前にあらわれない時には、〔物は〕それ以外に在り様が無いから〔心は〕所縁を失い、寂靜となる (*yadā na bhāvo nābhāvo mateḥ samtiṣṭhate purah / tadānyagatyabhāvena nirālambā praśāmyati //*)。

(54) 『書簡大註』は第21-22偈を「基・道・果」の基に位置づけ「甚深なる思想を道において実践する方法」を説くものとする。第21-22偈については『中観心論』3章第266偈には同様の議論がみられる。

認識対象は如何なる在り方によっても成立しないので、それについては分別的思惟を離れた認識さえ生起しないところのもの、これが比類ない真実であると、真実を知れる人々は知った (*jñeyasya sarvathāsiddher nirvikalpāpi yatra dhiḥ / notpadyate tad atulyam tattvaṃ tattvavidō viduḥ //*, *shes bya rnam kun ma grub phyir // gang la rnam par ma rtog pa'i // blo yang skye bar mi 'gyur ba // de nyid mnyam med de mkhyen gsungs //*)。(訳文は江島1980: 450を参照。)

(55) 『書簡要義』は第22-27を滅諦を現観するための方法を説くものと位置づけ、第22偈を見道によって滅を現観する方法を説くものとする。『書簡大註』は第21-22偈を「道」に位置づけ第23-27偈を「果」に位置づける。ここでいう「果」とは『書簡要義』でいわれるところの「滅諦」に相当する。

(56) 「洗い流したとき」(*sbyangs pa de'i tshe*)は『書簡大註』の読み。写本の読み *sbyangs pas de'i tshe* は構文上の理由で採用し難い。

(57) 『書簡要義』は第23偈を修道による滅の現観を説くものとし、『書簡大註』は第23-24偈を等至における法身の確認を説くものとする。「所縁のないままに鎮まる」(*dmigs pa med par rab tu zhi*)という表現については、第20偈の注記に引用した『入菩薩行論』9章第35偈d句 (*nirālambā praśāmyati*)を参照。

(58) 「水の上に水を注いだり」(*chu la chu bzhag dang*、字義どおりには「水の上に水を載せたり」)は写本および『書簡大註』の読み。第24偈はロンチェンパ著『宗義蔵』および『法界蔵』に引用され(加納2007: 15参照)、『法界蔵』は「水の中に水を混ぜたり」(*chu la chu thim dang*)という異読を示す。後者は、より理解しやすいが、諸本の状況から、後代に平易化された読み (*lectio facilior*)と考えて校訂テキストではこれを採用しなかった。その後、「注ぐ」(*bzhag*)という読みを支持する『教説階梯大論』(510b5-6)における本偈の引用および『五次第』の典拠(下記参照)がみつかり、校訂テキストにおける判断が正しかったことが確認できた。

(59) 「戲論を離れた所知自体」(*shes bya spros bral de nyid*)の「自体」(*de nyid*)は「真相」

(tattva)の意味で理解することも可能であり、その場合「所知である離戲論なる真相」と訳すことができる。

(60) 「それこそが」(de ni)は写本の読み。『書簡大註』の「そのとき」(de tshe)という読みも採用可能であるが、校訂テキストでは『宗義蔵』および『法界蔵』の読み(de nyid)と類似するという理由で写本の読み(de ni)を採用した。その後、『教説階梯大論』(510b6)の読み(de ni)によっても裏付けられた。

(61) 『書簡要義』によると、第24-27偈は無学道による滅の現観を説き、第24偈は比喩と意味によって法身を解説する。第24偈はトルンバ著『教説階梯大論』(510b5-6)に引用される(des na / ji ltar chu la chu bzhag dang // mar la mar ni rjes zhugs ltar // shes bya spros bral de nyid dang // dbyer med ye shes rnam 'dres pa // de ni sangs rgyas thams cad kyi // rang bzhin chos sku zhes byar brjod // ces bya ba dang)。その思想的な典拠は『五次第』2章第2偈にあると考えられる。

たとえば水の中に水を注いだり、バターにバターをつけたりするように、自身に属する知を自ら見るところ、ここにおいて〔こそ〕礼拝が〔なされるべし〕(yathā jalam jale nyastaṃ ghr̥taṃ caiva yathā ghr̥te / svakiyaṃ ca svayaṃ paśyej jñānaṃ yatreha vandanā //)。

この『五次第』の偈は例えばラトナーカラシャーンティ作『經集註宝光明莊嚴』に引用されるが(D3935, 8b5-6: slob dpon nyid kyi rim pa lnga pa las / ci ltar chu la chu bzhag dang // ci ltar mar la mar bzhag dang // rang gi rang gis ye shes ni // legs rtogs de ni 'dir phyag yin // zhes gsungs pa ...)、ロデンシェーラプが『五次第』を直接参照したのか、あるいは別文献における引用を通じて間接的に参照したのかは定かではない。

(62) 『書簡要義』によると第25偈は受用身を解説するというが、一方、『書簡大註』によると後得における色身を規定するという。また『教説階梯大論』(513b2-3)によると、受用身とは後得に関連するものであり清浄なる衆生において完全に顕現するものであるという。

(63) 『書簡要義』によると第26偈は法身と受用身を平等智として説き、一方、『書簡大註』によると第26-27偈は法身と色身を分けてから仏業のはたらきを説くという。第26偈は『教説階梯大論』(512a3-4)に引用される(des na ye shes gnyis po 'di ni gdon mi za bar gnas pa ste / snga ma ji lta nyid mkhyen ni // 'khrul med mnyam gzhang blo 'jug med // phyi ma ji snyed mkhyen pa ni // 'khrul snang rjes thob blo 'jug can zhes gang gsungs pa nyid do //)。

(64) 『書簡要義』によると、第27偈は変化身を解説するという。『宝性論』(4章第13-98偈)は衆生世界における仏のはたらきの現れ方、すなわち変化身について、『智光明莊嚴經』所説の九つの比喩、すなわち、帝釈、天鼓、雲、梵天、太陽、摩尼宝、こだま、虚空、大地を用いて説明する。また『書簡』同偈の「仏の变化身の集まりは、他者〔即ち衆生〕の識に顕現する」という表現については、『教説階梯大論』(513b3-4)に次のような類似する議論がみられる。

変化身はまた、他者の識の部分に含まれるので虚偽の本性をもち、不浄な衆生たちにおいて種々の御姿として顕現する特徴をもつ(sprul pa'i sku yang gzhan gyi rnam par rig pa'i chas bsdus pas bcos bu'i rang bzhin ma dag pa'i sems can rnam la sna tshogs kyi gzugs su snang ba'i mtshan nyid do //)。

- (65) 『書簡要義』は第28偈を「三乗の真髓」の説示と位置づけ、『書簡大註』はこれを結頌とする。
- (66) ここで『書簡』は自らを「発心儀軌」と呼ぶが、『書簡』全体において発心に直接言及する箇所は第3-6偈のみである。「発心儀軌」という語の解釈をめぐることは加納2007: 52、注57を参照。
- (67) 『書簡要義』は第29偈を「本誓を取得する儀軌を努めて教誡する」偈頌とする。『書簡大註』は第28偈を最終偈とし、第29偈を別出していない。
- (68) ロデンシェーラプの弟子トルンパは、『教説階梯大論』(347b1-6)において、龍樹の論書に記される論理的手法を理解するためにはアールヤデーヴァ、ナーガボーディ、ブツパーリタ、バヴァなどの師たちの著作『四百論』、『中観心論』、『般若灯論』などを参照する必要があると説く。Khang dkar Tshul khriims skal bzang 2004: VII-IX、および Cabezón 2009を参照。
- (69) 『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、74-75頁の、この活字本の奥書には「デブン寺十六羅漢堂から写本を拝借し、カムトゥル・ソナムドゥンドゥップがコンピューター入力した」とある。この活字本には誤字が少なからず含まれるが、逐一注記しない。
- (70) チョムデンリクレルが使用した『書簡』原本の写本では第19偈と第20偈が入れ替わっていた可能性も考えられる。
- (71) 「思想の内実」とは龍樹の著作に説かれる教説を指し、「それを理解するための原因(手立て)」とはダルマキールティ流の論理学的手法を指す。
- (72) 当項目は写本が一部判読できないため訳文は暫定的なものである。
- (73) 上記のごとく、ここに示される「回向」という項目とそれに対応する「慈悲の」(brtse ba'i)で始まる本文は、『書簡』写本にはない。
- (74) Phyiで始まる整理番号はデブン寺十六羅漢堂に特有のものであり、この整理番号を表紙にもつ写本は、たとえ現在他の場所に保存されている場合であっても、本来は十六羅漢堂に所蔵されていたことを示唆する。また Phyiの直後に並記される Tshaなどの記号は、そのテキストが属するジャンルを示す。十六羅漢堂の各写本表紙に記された整理番号とそれが示すジャンルについては、『デブン寺古籍目録』序文14-15頁を参照。
- (75) 奥書所出の題名より(Vol. 31, p. 67)。奥書には dpyod pa が、spyod pa と誤って綴られているため訂正した。『カダム全集目録』(以下、目録と略記)所掲の題名は *dBu ma'i de kho na nyid gtan la dbab pa*。
- (76) 奥書所出の題名より(Vol. 31, p. 180)。目録所掲の題名は *'Dul ba 'od ldan gyi tikka*。
- (77) 奥書所出の題名より(Vol. 31, p. 472)。目録所掲の題名は *Las brgya rtsa gcig*。
- (78) 奥書所出の題名より(Vol. 32, p. 399)。目録所掲の題名は *'Dul ba mdo rtsa'i 'grel pa lung kun las btus pa*。本作は、一作品が32巻から33巻へと巻を跨いで分割されているため、「上下」とした。
- (79) 奥書所出の題名より(Vol. 34, p. 45.8)。目録所掲の題名は *So sor thar pa'i rnam bshad*。
- (80) 奥書所出の題名より(Vol. 34, p. 96.7)。目録所掲の題名は *Sum brgya ba'i tikka*。
- (81) 奥書所出の題名より(Vol. 34, p. 189.2)。目録所掲の題名は *dGe tshul rnam kyī tshig lé'ur byas pa'i rnam bshad*。
- (82) 奥書所出の題名より(Vol. 35, p. 175.7)。目録所掲の題名は *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa'i 'grel pa*。

- (83) 奥書所出の題名より (Vol. 35, p. 433.4-5)。目録所掲の題名は *Shes rab sgrol ma'i sgra bshad skabs kyi mchan don*。
- (84) 奥書所出の題名より (Vol. 35, p. 512.2-4)。目録所掲の題名は '*Dul ba'i spyi don gyi rnam bshad*。
- (85) 奥書所出の題名より (Vol. 36, p. 141.7; p. 271.4)。目録所掲の題名は '*Grel pa 'od ldan gyi tshig don gsal byed*。
- (86) 奥書所出の題名より (Vol. 36, p. 405.1 = pp. 521.8-522.1)。本文冒頭所出の題名は *Lhung ba sde lnga'i kun tu spyod pa rin po che'i phreng ba go rims su bsdebs pa sgron ma* (p. 280.1)。目録所掲の題名は *Lhung ba sde lnga'i kun tu spyod pa rin po che'i sgron ma*。
- (87) 奥書所出の題名より (Vol. 36, p. 586.4)。目録所掲の題名は *dGe slong gi kun tu spyod pa*。
- (88) 奥書所出の題名より (Vol. 38, p. 170.9)。表紙頁に記される題名は '*Dul ba 'od ldan gyi 'grel pa bsdus don* (p. 155)。目録所掲の題名は '*Grel pa 'od dang ldan pa'i bsdus don*。
- (89) 奥書所出の題名より (Vol. 38, p. 381.4)。目録所掲の題名は *Me tog phreng rgyud kyi tikka legs bshad rgya mtsho*。
- (90) 奥書所出の題名より (Vol. 39, p. 69.7)。本文所出の題名は '*Dul ba lung sde bzhi kun las btus pa rin po che snang ba* (p. 10.1)。目録所掲の題名は '*Dul ba lung btus pa zhes bya ba'i dka' gnas*。
- (91) 奥書所出の題名より (Vol. 41, p. 372.2)。本文所出の題名は *Theg pa chen po'i chos mngon pa'i rgyan* (p. 12.1)。目録所掲の題名は *Chos mngon pa kun las btus pa'i rnam par bshad pa gsal ba'i rgyan*。
- (92) 奥書所出の題名より (Vol. 43, p. 555.7)。本文所出の題名は *mNgon pa chos kun la [= las] btus pa'i de kho na nyid 'byung ba* (Vol. 43, p. 12.1)。目録所掲の題名は *Chos mngon pa kun las btus pa'i de kho na nyid 'byung ba*。
- (93) 奥書所出の題名より (Vol. 44, p. 196.3)。目録所掲の題名は *Chos mngon pa gsal ba'i rgyan*。
- (94) 奥書および表紙頁所出の題名より (Vol. 44, p. 214.4; p. 199)。目録所掲の題名は *Tshad ma'i spyi skad bsdus pa*。
- (95) 同著者の伝記については sKyo ston sMon lam tshul khrims 作 *Chu mig pa chen po'i rnam thar*, Vol. 50, pp. 351-359 参照。
- (96) 本文所出の題名より (Vol. 45, p. 12.1)。目録所掲の題名は *Tshad ma sde bdun gyi don phyogs gcig tu bsdus pa*。
- (97) 奥書所出の題名より (Vol. 45, p. 181.6)。表紙頁、本文 (=目録所掲題名) に記される題名は *Tshad ma'i mtshan nyid rigs pa'i sgo 'byed* (p. 165 = p. 166.1)。
- (98) 奥書には「これらはナルタン寺の学者サムテンサンボ著『ブラマーナヴィニシュチャヤ註』から抜粋したものである」と記される ('*di rnam snar thang pa mkhas pa bsam gtan bzang pos mdzad pa'i tshad ma rnam nges kyi ti kā nas bshus pa'o*, Vol. 46, p. 25.4)。
- (99) 奥書所出の題名より (Vol. 46, p. 115.10)。本文所出の題名は *Shes bya'i gnas phra mo 'ga' zhis gsal bar byed pa legs par bshad pa'i gter mdzod blo gsal gyi yid la dga' ba gter ba* (p. 34.1)。表紙頁所出の題名は *Legs par bshad pa'i gter mdzod blo gsal gyi yid la dga' ba*



- gter byed* (p. 33)。目録所掲の題名は *Legs par bshad pa'i gter mdzod blo gsal yid la dga' ba ster byed*。
- (100) 奥書所出の題名より (Vol. 47, p. 165.6-7)。本文所出の題名は *Yang dag rigs pa'i gsal byed* (Vol. 47, p. 12.1)。目録所掲の題名は *Rigs pa'i gsal byed sgron ma*。
- (101) 奥書および本文所出の題名より (Vol. 47, p. 264.3-4; p. 262.1)。目録所掲の題名は *Mi g.yo ba dkar po'i bstod pa*。
- (102) 奥書所出の題名より (Vol. 47, p. 361)。目録所掲の題名は *sMon pa sems bskyed kyi cho ga*。
- (103) 奥書所出の題名より (Vol. 47, p. 406.6)。表紙頁に記される題名は *De bzhin gshegs pa brgyad 'khor dang bcas pa la gsol ba gdab pa'i gdams pa* (Vol. 47, p. 363)。目録所掲の題名は *De bzhin gshegs pa brgyad 'khor dang bcas pa la gsol ba gdab pa*。
- (104) この題名は目録编者によるものであり、テキスト本文には現れない。本作は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、135-140頁に収録され、チョムデンリクレルの作品とみなされが、奥書には「比丘ナムカタクによってまとめられた」とあるので、本作の著者をチョムデンリクレルとする根拠は特にない。
- (105) 本文および表紙頁所出の題名より (Vol. 47, p. 424.1 = p. 423)。目録所掲の題名は *gNas brtan phyag mchod kyi rim pa'i phyag len gsal 'debs*。
- (106) 奥書所出の題名より (Vol. 48, p. 104.3)。目録所掲の題名は *gNas brtan sgrub yig rgyas pa*。
- (107) 目録25頁に 'go とあるのは mgo の誤り。
- (108) 目録25頁に rwa を欠き、sprengs とあるのは誤り。奥書には手紙を差し出した日付が記される (dpal snar thang gi dben gnas dam pa nas ra sgrenng rgyal ba'i dben gnas kyi gtsug lag khang chen por shing pho spre'u'i lo dbyar zla ra ba'i dus su phul ba'i 'phrin yig rdzogs so, Vol. 48, p. 293.6)。
- (109) 本文冒頭部所出の題名より (Vol. 49, p. 10.1-2)。目録所掲の題名は *sKyes rabs rgyud kyi dka' 'grel*。
- (110) 奥書所出の題名より (Vol. 49, p. 198.4)。目録所掲の題名は *Byang chub sems 'grel gyi bsdus don*。
- (111) 奥書所出の題名より (Vol. 49, p. 262.2-3)。目録所掲の題名は *mNgon pa mdzod kyi bsdus don*。
- (112) 奥書所出の題名より (Vol. 50, p. 26.7)。目録所掲の題名は *dBu ma tshig gsal gyi spyi don*。
- (113) 奥書所出の題名より (Vol. 50, p. 145.8-9)。目録所掲の題名は *gZhi lam 'bras gsum gyi rnam gzhas zhes pa shes phyin mngon rtogs rgyan gyi 'grel pa*。
- (114) 表紙頁に記される題名より (Vol. 50, p. 253)。目録所掲の題名は *mKhan rin po che snar thang brgyad par byon pa'i gsan yig*。
- (115) 表紙頁に記される題名より (Vol. 50, p. 317)。目録所掲の題名は *sNar thang gi gdan sa bdun pa'i rnam thar*。奥書には以下のように記される: dpal ldan snar thang gi gdan sa bdun pa mdzad pa la yon tan dran pa'i sgo nas dad pa skul byed dgos 'dod dbyung pa'i

rin [= rin chen] gter mdzod, (p. 350.5-6)。

(116) 目録25頁に bla'i とあるのを bla ma'i に訂正。表紙頁参照(Vol. 50, p. 275)。

(117) 奥書所出の題名より(Vol. 50, p. 403.7)。表紙頁に記される題名は *sDe snod bcud bsdus man ngag snying po* (p. 395)。目録所掲の題名は *sDe snod bcud bsdus man ngag*。

(118) 奥書所出の題名より(Vol. 50, p. 416.3)。表紙頁に記される題名は *mNgon rtogs rgyan gyi khrid* (p. 405)。目録所掲の題名は *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag*。

(119) チョムデンリクレルの作品を集めたものには、『カダム全集』のほかに、『リクレル全集』全十巻と『リクレル小作品集』全二巻がある。前者は主にデブン寺十六羅漢堂の写本を活字化したテキスト集成であり、後者は写本の影印版である。この二つの集成は、『カダム全集』に収録されない作品を含む。それを列挙すると以下のごとくである。

①『カダム全集』未収録の作品のうち『リクレル全集』所収のもの:

*bCom ldan rig pa'i ral gri'i rnam thar dad pa'i ljon shing* [Vol. 1 (Ka), pp. 1-94]

*Yum shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag* [Vol. 5 (Ca), pp. 637-644]

*Chos dang chos nyid rnam par 'byed pa* [Vol. 5 (Ca), pp. 646-650]

*Chos dang chos nyid rgyan gyi me tog* [Vol. 5 (Ca), pp. 651-677]

*dPal dgyes pa rdo rje'i sgrub thabs* [Vol. 9 (Ta), pp. 224-233]

*Yang dag grub pa'i sgrub thabs* [Vol. 9 (Ta), pp. 457-473]

*'Brel ba brtag pa rgyan gyi me tog* [Vol. 10 (Tha), pp. 48-56]

*gSang snying sgrub pa rgyan gyi me tog* [Vol. 10 (Tha), pp. 142-179]

②『カダム全集』未収録の作品のうち『リクレル小作品集』所収されるもの(『リクレル小作品集』は巻全体の通し番号を欠くため以下に葉番号を示すが、各作品が独立した葉番号を持つため一部重複する。葉番号が二重に附されているものは一つを丸括弧内に示した):

*Theg pa chen po mdo sde rgyan rnam par bshad pa'i me tog* (表紙頁より) = *Theg pa chen po mdo sde rgyan gyi pin tartha* (奥書より)。[Vol. 1, fols. 1-26b (=169a-194b)]

*dBu ma rgyan gyi rnam par bshad pa tshig don gsal ba'i me tog*. [Vol. 1, fols. 1-28a (=426a-453a)]

*bCom ldan rig pa'i ral gri'i rnam thar dad pa'i ljon shing* (bSam gtan bzang po 著) [Vol. 1, fols. 1a-26a]

*dBu ma rtsa shes rgyan gyi me tog*. [Vol. 1, fols. 1a-113a (=210a-322a)]

*rNal 'byor spyod pa bzhi brgya pa rgyan gyi me tog*. [Vol. 1, fols. 1-102a (=323a-425a)]

*rGyud bla ma'i ti ka rgyan gyi me tog*. [Vol. 1, fols. 1-15b (=195a-209b)]

チョムデンリクレルの人物像と著作については、以上の資料を精読することによって今後次第に明らかにされるであろう。関連資料として、バクパがチョムデンリクレルに宛てた二通の手紙が、近年刊行された下記の『サキャ全集』に収録される。*Sa skya bka' 'bum dpe bsdur ma* (ed. dPal brtesgs pod yig dpe rnying zhib 'jug khang), Krung go'i bod rig dpe skrung khang 2007 (Vol. 22, pp. 331-333; Vol. 27, pp. 207-208)。

(120) 表紙頁に記される題名より(Vol. 51, p. 37)。目録所掲の題名は *bCom ldan rig ral gyi bstan bcos rtsom pa'i dkar chag*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 1 (Ka)、24-38頁所収。

- (121) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 1 (Ka)、96-257頁所収。『リクレル小作品集』Vol. 2には、78葉からなる同一作品の別写本が収録される。
- (122) 奥書所出の題名より (Vol. 51, p. 317.1)。目録所掲の題名は *bSlab pa gsum rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 1 (Ka)、258-439頁所収。
- (123) 奥書および表紙頁所出の題名より (Vol. 51, p. 326.1 = p. 319)。目録所掲の題名は *bsNyen gnas kyi cho ga*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 1 (Ka)、440-448頁所収。
- (124) 奥書所出の題名より (Vol. 51, p. 344.8)。本文冒頭部所出の題名は *Byang chub tu sems bskyed pa'i cho ga rgyan gyi me tog* (p. 328.1)。表紙頁に記される題名は *Sems bskyed rgyan gyi me tog* (p. 327)。目録所掲の題名は *Sems bskyed kyi cho ga rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 2 (Kha)、1-26頁所収。
- (125) 本文冒頭部所出の題名は *sKyes pa'i rabs rgyan gyi me tog* (Vol. 51, p. 350.1-2)。表紙頁に記される題名は *Sangs rgyas kyi skyes pa'i rabs* (Vol. 51, p. 349)。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 2 (Kha)、185-604頁所収。
- (126) 三つの短い讃頌が含まれる。第一作品と第二作品の作品名は奥書による (Vol. 52, p. 8.1-2; p. 10.2-3)。目録所掲の題名は各々、*bDe ba can gyi bstod pa 'dzam bu'i sil snyan*; *dPal ldan mar me mdzad ye shes la bstod pa*。第三作品には作品名がない。*brTson ldan gyi thos bsam pa rnam la bstod pa* は、目録編者によって与えられた仮の題名。第一作品の活字版は『リクレル全集』Vol. 2 (Kha)、606-612頁所収。
- (127) 奥書所出の題名より (Vol. 52, p. 21.3-4)。本文冒頭 (p. 16.1) 所出の題名は *Sangs rgyas mi 'khrugs pa'i zhing khams kyi bstod pa thar pa'i sil snyan*。目録所掲の題名は *mNgon dga'i zhing la bstod pa thar pa'i sil snyan*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 2 (Kha)、613-619頁所収。
- (128) 奥書所出の題名より (Vol. 52, p. 40.1)。本文冒頭 (p. 24.1-2) 所出の題名は *bCom ldan ldas ma shes rab pha rol phyin pa'i snying po rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、618-635頁所収。
- (129) 本文冒頭所出の題名より (Vol. 52, p. 42.1)。表紙頁 (p. 39) には本文冒頭と同じ梵文題名 (*Sha ta sa ha sri ka pra jñā pā ra mi ta a lam ka ra pu spe nā ma bijaharam*) が記され、藏文題名は無い。奥書 (p. 68.9) 所出の題名は *rGyal ba'i yum stong phrag brgya pa la swogs pa'i rgyan gyi me tog*。目録所掲の題名は *sTong phrag brgya pa rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、565-617頁所収。
- (130) 表紙頁 (Vol. 52, p. 75) 所出題名は *Phar phyin brgyan gyi me tog*、本文冒頭 (p. 76.1) 所出の題名は *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i 'grel bshad mngon par rtogs pa'i rgyan gyi me tog*、奥書 (p. 449.7) には題名 *rGyal ba'i yum gyi 'grel bshad mngon par rtogs pa rgyan gyi me tog* および副題 *Shes bya'i rgya mtsho* が記される。目録所掲の題名は *Phar phyin rgyan gyi me tog*。奥書によると本作はナルタン寺で著作されたという。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 3 (Ga)、1-778頁所収。
- (131) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、678-679頁所収。なお『リクレル小作品集』Vol. 1, fols. 1-28a (= 426a-453a) には、ラトナーカラシャーントンティ著『中観莊嚴口決』に対する注釈、*dBu ma rgyan gyi rnam par bshad pa tshig don gsal ba'i me tog* が含まれる。

- (132) 奥書所出の題名より (Vol. 52, p. 459.4)。目録所掲の題名は *rGyan bdun bshad pa rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、235-250頁所収。
- (133) 本文冒頭および奥書所出の題名より (Vol. 53, p. 10.1; p. 155.8-9)。目録所掲題名は *Grub pa'i mtha' rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、102-425頁所収。『リクレル小作品集』Vol. 2には144葉からなる同一作品の別写本が収録される。
- (134) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、36-47頁所収。
- (135) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、64-73頁所収。
- (136) 奥書末尾には小さい文字で筆写の日付が記される (Vol. 53, p. 189: *smal po'i zla ba nyi shu lnga'i nyin bar bris so*)。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、75-100頁所収。
- (137) 表紙頁および奥書所出の題名より (Vol. 53, p. 191; p. 201.1 = 目録所掲題名)。本文冒頭所出の題名は *'Khor ba dang mya ngan las 'das pa rgyan gyi me tog* (p. 192.1-2)。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、252-258頁所収(末尾に混乱あり)。
- (138) 奥書所出の題名より (Vol. 43, p. 303.4)。表紙頁所出題名は *bDen bzhi rgyan gyi me tog* (p. 207 = 目録所掲題名)。本文冒頭(p. 208.1-2)所出題名は *'Phags pa'i bden pa bzhi rnam par bshad pa rgyan gyi me tog*。奥書によるとメトクダンチェン寺(*rtsang [= gtsang]*) *me tog mdangs can gyi dgon pa*)で著作されたという。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、427-538頁所収。
- (139) 本文冒頭および奥書所出の題名より (Vol. 53, p. 306.1; p. 330.1)。目録所掲の題名は *rDo rje gdan pa rgyan gyi me tog*。奥書にはナルタン寺で著作、筆記された旨が記される。
- (140) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、540-563頁所収。
- (141) 本文冒頭および奥書所出の題名より (Vol. 53, p. 352.1-2; p. 440.1)。目録は、副題である *Ngag gi dbang phyug grub pa* を欠く。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 8 (Nya)、1-92頁所収。
- (142) 奥書所出の題名より (Vol. 53, p. 526.8)。本文冒頭(p. 446.1)には *Tshad ma kun las btus pa rgyan gyi me tog* とある。目録所掲の題名は *Tshad ma kun btus rgyan gyi me tog*。
- (143) 奥書所出の題名より (Vol. 54, p. 323.5)。本文冒頭(p. 10.1)所出の題名は *Tshad ma rnam par nges pa'i rgyan gyi me tog*。目録所掲の題名は *Tshad ma rnam par nges pa'i tikka rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 7 (Ja)、1-722頁所収。
- (144) 目録30頁に *rgyan rgyan* とあるのは *rgyan* の誤り。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 6 (Cha)、1-281頁所収。同書は中国から1991年に洋装本活字本が出版されている (*Tshad ma sde bdun rgyan gyi me tog*, (ed.) *rDo rje rgyal po*. Peking: *Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang*)。
- (145) この題名は目録作者によるものであり、写本には現れない。内容は二つの部分からなる。すなわち、前半部分 (Vol. 55, pp. 6.1-12.1) は、ダルマキールティ作 *Sambandhapariṣā* の本文とそれに対する行間註 (*mchan*)、そして後半部分 (pp. 12.1-5) は *'Brel pa brtag pa'i don legs par bsdus pa* と題される科文である。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、57-68頁所収。
- (146) 奥書 (Vol. 55, p. 24.1) には *rTsoed pa'i rigs pa dam pa'i bsdus don* とある。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 8 (Nya)、245-260頁所収。

- (147) 本文冒頭および奥書(Vol. 55, p. 34.1; p. 177.2)には *rTsod pa'i rigs pa rgyan gyi me tog* とあり、表紙頁(p. 33)には *rTsod rigs rgyan gyi me tog* (= 目録所掲題名)とある。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 8 (Nya)、93-243頁所収。
- (148) 奥書所出の題名より(Vol. 55, pp. 184.5-186.1)。本文冒頭(p. 180.1)所出の題名は *sKu gzugs kyi mtshan nyid rgyan gyi me tog* (= 目録所掲題名)。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 8 (Nya)、261-269頁所収。
- (149) 表紙頁および奥書所出の題名より(Vol. 55, p. 195; p. 343.4-5 = 目録所掲題名)。本文冒頭(p. 196.1)所出の題名は *sMan gyi rig pa rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 8 (Nya)、315-453頁所収。
- (150) 奥書所出の題名より(Vol. 55, p. 352.2 = 目録所掲題名)。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、39-46頁所収。
- (151) 表紙頁、本文冒頭、奥書所出の題名より(Vol. 55, p. 353; p. 354.2; p. 383.4 = 目録所掲題名)。ともに *btus* を *bstus* と誤記する。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、1-35頁所収。
- (152) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、474-518頁所収。
- (153) 本文冒頭および奥書所出の題名より(Vol. 55, p. 427.1; p. 428.4)。目録所掲の題名は *sPyan ras gzigs seng ge sgra'i man ngag*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、599-600頁所収。
- (154) 奥書所出の題名より(Vol. 55, p. 430.7-8)。目録所掲の題名は *rNam snang mngon par byang chub pa'i sku gsum gyi dkyil 'khor bsgom thabs*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、596-598頁所収。
- (155) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、1-8頁所収。
- (156) 奥書所出の題名より(Vol. 55, p. 481.2)。表紙頁および本文冒頭所掲の題名は *'Phags pa 'jam dpal gyi mtshan yang dag par brjod pa rgyan gyi me tog* (p. 439; p. 440.1-2 = 目録所掲題名)。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、520-568頁所収。
- (157) 奥書所出の題名より(Vol. 55, p. 488.2 = 目録所掲題名)。本文冒頭(p. 484.1)所掲の題名は *mTshan yang dag par brjod pa'i sgrub thabs*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、570-575頁所収。
- (158) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、120-134頁所収。
- (159) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 8 (Nya)、301-313頁所収。
- (160) 奥書所出の題名より(Vol. 56, p. 10.1)。本文冒頭(p. 8.1)所出の題名は *bCom ldan 'das sākya thub pa'i sgrub thabs*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、577-580頁所収。
- (161) 奥書所出の題名より(Vol. 56, p. 13.3)。本文冒頭(p. 12.1)所出の題名は *'Phags pa byams pa'i sgrub thabs*。目録所掲の題名は *'Phags pa byams pa'i sgrub thabs rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、582-594頁所収。
- (162) 表紙頁および本文冒頭所出の題名より(Vol. 56, p. 15; p. 16.1-2)。奥書(p. 23.4)所出の題名は *Phyag na rdo rje la bstod pa gsang bdag rgyan gyi me tog*。目録所掲の題名は *rgyan gyi me tog* を欠く(目録31頁に *rgyan na rdo rje* とあるのは *phyag na rdo rje* の誤りで、同

- 94頁および写本は正しく *phyag* と読む)。本作品は末尾(Vol. 56, pp. 23-24)に『金剛手讃』の科文(未完)を付す。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、604-615頁所収。
- (163) 表紙頁所掲の題名より(Vol. 56, p. 25)。目録所掲の題名は *Seng ldeng nags kyi sgröl ma'i sgrub thabs*。本作は、*Seng ldeng nags kyi sgröl ma'i lo rgyus/bsGrub thabs kyi lo rgyus* (pp. 26.1-27.1)と *sGröl ma'i bsgrub thabs*(pp. 27.2-28.1)の二部から成る。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、616-619頁所収。
- (164) 奥書所出の題名より(Vol. 56, p. 32.3)。表紙頁(p. 29)所掲の題名は *Nyi shu rtsa gcig zhal gyi sgrub thabs*。目録所掲の題名は *'Phags ma sgröl ma nyi shu rtsa gcig gi sgrub thabs*。
- (165) 上部欄外に *ri khrod lo ma can 2 bzhugs so* と覚書があるように、33-34頁には二つの *Ri khrod lo ma can gyi sgrub thabs* が連続して書写されているが、異なる作品である。第一はチョムデンリクレルによる著作、第二はテンギユル所収の作品(北京版4181番、デルゲ版東北番号3360番に相当)である。
- (166) 奥書(Vol. 56, p. 34.9)には、*ri khrod lo ma can gyi sgrub thabs rdzogs s.hyo // paṅ ḍi ta don yod rdo rje dang / 'kham pa lo tsha ba dge slong ba ri pas sgyur zhing zhu pa' o // u pas ze'u la snar thang du gnang ngo //*とある。上記のごとく本作はテンギユル所収作品であり、チョムデンリクレルの著作ではない。
- (167) 表紙頁の上部欄外所出の題名より(Vol. 56, p. 35 = 目録所掲題名)。奥書(p. 36.2-3)に *slob dpon pad mas mdzad pa'i tshe bsgrub rdzogs s.ho // ze'us bris dge'o //*とあるように、本作はチョムデンリクレルの著作ではない。目録31頁に *gshehs* とあるのは *gshegs* の誤り。
- (168) 表紙頁(Vol. 56, p. 37)の上部欄外所出の題名 *mi g.yo ba'i dmigs pa skor 3* より。奥書(p. 38.10)には *bla ma snar thang pa brgyad par byon pa des [= sKyo ston sMon lam tshul khriims] btsun pa chos kyi rgyal mtshan [= bCom ldan rig ral] la gnang ste bris shing zhus dag go // snar thang du zhus bris so //*とある。鉤括弧内に筆写が補ったように、本作品はモンラムツルティムがチョムデンリクレルに授けた教である。
- (169) 奥書所出の題名より(Vol. 56, p. 40)。目録所掲の題名は *Sangs rgyas tshe dpag med kyi sgrub thabs*。
- (170) 奥書所出の題名より(Vol. 56, p. 42.4-5)。本文冒頭(p. 41.1)所出の題名および目録所掲の題名は *rgyan gyi me tog* を欠く。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、601-603頁所収。
- (171) 本作品 *Don zhags kyi bsnyung gnas kyi man ngag* (Vol. 56, pp. 43-45)と、連続して書写される *Don zhags kyi bsdu don* (pp. 45-46)は一对のテキストである。目録31頁に *don gzhan* とあるのは *don zhags* の誤り。
- (172) 表紙頁所出の題名より(Vol. 56, p. 53 = 目録所掲題名)。奥書(p. 65.1-3)には *phyogs bcu dus gsum gyi 'phags pa'i gang zag thams cad mchod pa'i cho ga rgyan gyi me tog ces bya ba stod mnga' ris 'dul ba 'dzin pa dge slong mgon ldan 'od ces bya bas bskul nas mang du thos pa'i dge slong bcom ldan ral gris dpal ldan snar thang gi dgon par bkod pa rdzogs so //*「『十方三世の一切の聖人を供養する儀軌・莊嚴華』は、ガリの持律比丘ゴンデンウーによって請願されて多聞比丘チョムデンレルティが吉祥ナルタン寺で著作した」と

- ある。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、105-118頁に収録される。
- (173) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 8 (Nya)、270-300頁所収。奥書(Vol. 56, p. 93.3-4)によると、本作はナーガボーディ(『二十儀軌』)、ディーパンカラバドラ(『四百五十頌』)、およびアバヤーカラグプタ著『ヴァジュラーヴァリー』に従って著述されたとある(括弧内は本稿筆者による)。また著述地は Me tog gdangs can gyi dgon pa とある。
- (174) 本文冒頭所掲の題名より(Vol. 56, p. 96.1)。表紙頁(p. 96.1)所掲の題名は *Chab gtor 'jam dpal ma'i gzhung*。目録所掲の題名は *Chab gtor 'jam dpal ma'i mtshan dang bcas*。本作品はテンギェル所収の *Chu gtor gyi cho ga* (北京版4593番、デルゲ版東北3775番)の本文とそれに対する行間註(mchan)よりなる。奥書(p. 103.6)では「チベット語に訳されたバリ供養儀軌のうちで本作品よりも優れたものは見当たらない。」(bod du 'gyur ba'i gtor chog la 'di las legs pa mi snang ngo)と述べたあと、「行間小文字註はチョムデンレルティが附した。」(mchan chung bcom ldan ral gris btab)とあり、そしてテキストの相承について述べる(bcom ldan ral gri nyid las skyi ston dpa' bo gnyis pas thob)。
- (175) 奥書所出の題名より(Vol. 56, p. 248.1)。表紙頁(p. 109)および本文冒頭(p. 110.1-2)所掲の題名は *mDo sde rgyan gyi me tog*。目録所掲の題名は *mDo sde rgyan gyi me tog ces bya ba'i dka' gnad*。奥書によると著作場所はツァン地方の Me tog mdangs can gyi dgon pa。本作は、その題名に示される通り、種々の経典からの引用を集めたアンソロジー的な作品である。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 2 (Kha)、28-182頁所収。
- なお、『リクレル小作品集』Vol. 1, fols. 1-26b (=169a-194b)に収録される *Theg pa chen po mdo sde rgyan rnam par bshad pa'i me tog* (奥書によると *Theg pa chen po mdo sde rgyan gyi pin tartha*)は『大乘莊嚴經論』に対する注釈であり、別作品である。
- (176) 目録32頁に spreng とあるのは springs の誤り。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、70-75頁所収。ロデンシェーラブ著『書簡・甘露の滴』に対する科文。テキスト全文と和訳は本稿「資料」所掲。
- (177) 目録32頁に me tog gi とあるのは me tog gis の誤り。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 5 (Ca)、49-63頁所収。
- (178) 本文冒頭(Vol. 56, p. 269.1)が *dGyes pa rdo rje'i brgyud pa* という語から始まるので、これを題名と考えた。目録所掲の題名は *dGyes pa rdo rje'i rgyud 'debs*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、222-223頁所収。『ヘーヴァジュラタントラ』の相承譜。
- (179) 本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、22-221頁所収。奥書によると著述地は Me tog mdangs can gyi dgon pa。本作品は『ヘーヴァジュラタントラ』の注釈。
- (180) 奥書所出の題名より(Vol. 56, p. 471.4)。目録所掲の題名は *rGyud brtag pa gnyis pa'i bsdus don*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、9-37頁所収。本作品は『ヘーヴァジュラタントラ』に対する科文。
- (181) 奥書所出の題名より(Vol. 56, p. 492.1)。本文冒頭(p. 474.2-3)所掲の題名は *rNal 'byor ma kun du spyod pa rgyan gyi me tog*。表紙頁(p. 473)および目録所掲の題名は *rGyud kun tu spyod pa rgyan gyi me tog*。本作品は『ヨーギニーサンチャーラ』に対する注釈。奥書によると著作地はツァン地方 Me tog mdangs can gyi nags khrod。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 9 (Ta)、1-21頁所収。

- (182) 奥書によると著作地は *Me tog mdangs can gyi dgon pa*。
- (183) 本作は二部(Vol. 56, pp. 502-510および pp. 511-512)よりなる。第一部の奥書(p. 510.7-8)には *mkha' 'gro seng ge'i gdong can gyi rdo rje tshig rkang dang po'i lag len / i thi // zab par shor //*とあり、第二部は上部欄外に整理番号 *Phyi Ma 1025*が記され、冒頭(p. 511.1)は *na mo 'gu ru / dmar po zhabs kyi man nga la /*にはじまり、文末 (p. 512) は教えの相承系譜 (*…des bcom ldan ral gri / thugs dgyes par zhu //*) で終わる。この作品にはチョムデンリクレルが著したことを明示する記述はみあたらないが、『カダム全集』編者はこの第二部の文末の記述にもとづいてこれらの二部作をチョムデンリクレルの著作に帰したと思われる。
- (184) 目録32頁に *rgyu* とあるのは *sgyu* の誤り。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 10 (Tha)、77-104頁所収。
- (185) 『サンチャヤガター』の科文。奥書(Vol. 56, p. 552.5)所掲の題名は *'Phags pa bsudud (sic) pa'i pintartha [= piṇḍārtha]*。表紙頁所掲(p. 539)の題名は *sDud pa thigs su bcad pa*。目録所掲の題名は *'Phags pa sdud pa'i pin tar tha slob dpon seng ge bzang po'i sdud 'grel dang mthun pa*。
- (186) 本作は『十万頌般若』の奥書を抜粋したものである。文末(Vol. 56, p. 554.4)には *'bum gyi gyur byang bcom ldan ral gris bkod pa'o //*とある。目録所掲の題名は *rGyas pa 'bum gyi 'gyur byang drug bshad pa*。
- (187) 奥書所出の題名より(Vol. 57, p. 664.3)。本文冒頭(p. 12.1)所掲の題名は *Chos mngon pa kun las btus pa'i rgyan gyi me tog*。表紙頁(p. 11)は、印刷が誤って反転している。本文のうち、231-373頁のテキストは活字文であり、それ以外は写本原本の影印版である。目録所掲の題名は *mNgon pa kun las btus pa'i bshad pa rgyan gyi me tog*。本作の活字版は『リクレル全集』Vol. 4 (Nga)、1-734頁所収。
- (188) 表紙頁(Vol. 58, p. 23)および目録所掲の題名より。奥書(p. 49.4-5)には次のようにある。  
*smon 'jug gi sems bskyed kyi cho ga / jo bo chen po rje'i cho ga'i gzhung las ji ltar 'byung ba rnams / bla ma rnams kyi phyag len dang sbyar nas btsun pa thogs med kyis dngul chu'i chos rdzong du bkod pa'o //* この奥書に続いて回向文が記され、次の作品が連写されている。
- (189) 本作は菩薩律儀の教えの相承系譜である。奥書(Vol. 58, p. 50.4-5)には次のようにある。  
*byang sems tsam sdom pa'i brgyud pa'i bla ma rnams la phyag tshal ba 'di btsun pa thogs med kyis sbyar ba'o //*
- (190) 奥書(p. 76. 5-6)には次のようにある。*slob dpon chen po zhi ba lha'i lugs kyi smon 'jug gi sems bskyed kyi cho ga 'di / yang dag pa'i yongs kyi dge ba'i bshes gnyen 'jam dpal rdo rje snying po'i bkas bskul nas / thogs med kyis sbyar ba 'dis / 'gro ba mang po la phan thogs shing 'khor ba'i rgya mtsho skems par gyur cig / shubham //* 表紙頁(Vol. 58, p. 51)および目録所掲の題名は *sMon 'jug sems bskyed kyi cho ga*。
- (191) 奥書(Vol. 58, p. 78.1)には次のようにある。*smon 'jug sems bskyed kyi rgyud pa'i bla ma rnams la bstod pa 'di / lung rigs 'dzin pa se ston gyis bskul ba'i don du / chos smra ba'i btsun pa thogs med kyis chos rdzong du bkod pa'i yig ge pa ni 'jam dbyangs dkar*



po'o // shubham //

(192) 奥書(Vol. 58, p. 78.4)には次のようにある。dbu ma lugs su grags pa'i sems bskyed brgyud pa la phyag 'tshal ba 'di yang / btsun pa thogs med kyis bkod pa'o // rgyal ba thams cad kyi dam pa'i chos 'dzin par gyur cig / shubham //

(193) 奥書所出の題名より(Vol. 58, p. 84.6)。目録において本作は次の作品と一緒に、*don bdun ma brgyud pa'i gsol 'debs dang bcas pa*(表紙頁所掲題名, Vol. 58, p. 81)という題名で記載されるが、実際は二つの独立した作品である。

(194) 奥書所出の題名より(Vol. 58, p. 109.6)。本作の写本は『カダム全集』Vol.58に都合二本収録される。すなわち、本写本 Vol. 58, pp. 84-110および pp. 249-286である。また Vol. 58, pp. 311.4-368.9および Vol. 59, pp. 31.3-163.1所収作品も同じ序文と奥書を持つが、明らかに分量が多いため精査を要する。

(195) 表紙頁(Vol. 58, p. 115)には rgyal sras thogs med pa'i bka' 'bum thor bu という題名が現れる。本作はギェルセトクメの小作品集(bka' 'bum thor bu)であり、平均して2葉ほどの分量の韻文作品がその大半をしめる。その内容の概観は『カダム全集』編者が附した目次(p. 112-113)より知ることができる。

(196) 表紙頁(Vol. 58, p. 249)所掲の題名は *Blo sbyong do do (sic) bdun ma*。

(197) 表紙頁(Vol. 58, p. 287)所掲の題名は *rTen 'brel snying po'i khrid yig*。奥書(p. 297. 1)所掲の題名は *rTen 'brel snying po'i khrid kyi rim pa*。奥書(p. 297.3-5)には Chos kyi rje dpal ldan bal ma dam pa Rin chen shes rab 'bum の懇請によって、Thogs med が Yar lung bsam gtan gling にて著作したとある。

(198) 奥書所出の題名より(Vol. 58, p. 300.2)。奥書によると著作地は dNgul chu'i rdzong とある。

(199) 表紙頁所掲の題名より(Vol. 58, p. 301)。この写本には以下のテキストが含まれる。

pp. 301-311.4: アティシャ略伝およびロジョンの教えの相承史、

pp. 311.4-368.9: *Blo sbyong don bdun ma'i snyan brgyud kyi tshig rnamts yi ge nyung ngu'i sgo nas bkrol ba*、

pp. 368.9-369.9: 奥書と回向文、

pp. 370-375.4: *dMar gyi zin bris*、

pp. 375.5-379.4: *rGyud pa'i rnam thar*、

pp. 379.4-380.3: 回向文。

同写本の Vol. 58, pp. 311-369は Vol. 59, pp. 9-165所収写本と同内容。

(200) 本作品は以下の内容からなる。

pp. 10-31.3: アティシャ略伝およびロジョンの教えの相承史、

pp. 31.3-163.1: *Blo sbyong don bdun ma'i snyan brgyud kyi tshig rnamts yi ge nyung ngu'i sgo nas bkrol ba*、

pp. 163.1-165.4: 奥書と回向文、

上記注199所掲の前三者と同内容。

(201) 本写本には祈願文などの種々の小作品が含まれる。

(202) Vol. 59, pp. 279-286までに連写される一連の作品について目録は、総括して、*Sangs rgyas*

*byang sems la bstod pa dang sman bla'i rjes gnang* と題する。写本表紙頁(p. 279)所掲の題名は'*Phyogs bcu'i sangs rgyas dang byang chub sems dpa' la bstod pa dang sman bla'i rjes gnang sogs*。

- (203) 本作は、Vol. 59, p. 287に始まる一連の作品の中の最後に位置する讃頌作品。奥書などに本作の題名が明記されないため、便宜上 *gSol 'debs* と題した。奥書(p. 301.6-7)には、本作が、*Mi nyag Blo ldan dpal* と、*dPal ldan ye shes* に懇願され、*Thogs med* が *dNgul chu'i chos rdzong* にて著作したと記される。
- (204) この題名は表紙頁(Vol. 59, 333)、本文冒頭(p. 334.1)および奥書(p. 461.3)において一致して現れる。いっぽう目録所掲の題名は *Theg pa chen po rgyud bla ma'i nges don gsal ba* とある。奥書(p. 461.3)によると著作地は、*dPal E'i chos gra chen po*。本作品の別写本を撮影したフィルムは NGMPP reel no. L 165/2に収録される。
- (205) 奥書(Vol. 60, p. 415.4)には作品を著述した地名が以下のように示される。*Chos smra ba thogs med kyis dpal ye'i gtsug lag khang du sbyar ba rdzogs s.ho //*

<キーワード> ゴク・ロデンシェーラプ、『書簡・甘露の滴』、デプン寺所蔵古写本、『カダム全集』第2輯。